

鵠沼

久 久 比 奴 末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 1 1 5 号

藤沢駅南口周辺の移り変わり……………佐藤 和子 ……1	
— 昭和20年からの思い出をたどって —	
芥川龍之介の中国旅行と「手帳」……………神谷 祐太…13	
民俗学者 丸山久子 伝 ……………岡田 哲明…23	
Coffee Break……………30	
小田急 鵠沼本町駅……………有田 裕一…32	
— 鵠沼賀来神社境内にある道標 —	
わたしの鵠沼の思い出 <3>	
鵠沼海岸での釣りは別荘の池での魚とりから始まった……内藤 喜嗣…36	
《事業報告》 鵠沼地区公民館まつり展示	
『岸田劉生来鵠100年 絵日記から分かる鵠沼での生活』 ……………51	
鵠沼地区公民館まつりの展示に参加して……………笠羽巳年子…52	
故 長谷川祐さんへの挨拶 ……………森岡 澄……54	
『鵠沼を巡る千一話』より	
鵠沼の範囲は？……………渡部 瞭……55	
活動の記録(平成29年4月～11月)……………59	
編集後記 …………… 62	

『新編相模国風土記稿』（天保12年、1841）に、「鵠沼村久久比奴末牟良」

とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる。

鵠 沼 を 語 る 会 発行

藤沢駅南口周辺の移り変わり

— 昭和 20 年からの思い出をたどって —

佐藤 和子（会員）

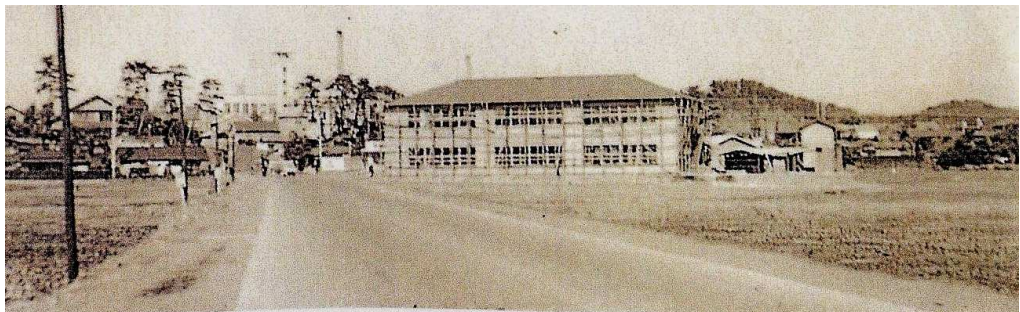
藤沢駅を南口に降り立つと、戦後間もなくからこのあたりを知る人には、その頃とは全く違う風景が目飛び込んでくる。今では何も感じることなく生活しているが、ここでちょっとあの頃の様子を思い出してみることにした。

終戦は小学校 4 年生の時だった。日々激しくなる空襲で東京の家は全焼、やっとたどり着いた鵜沼の家は、橘通りを 10 分ほど南へ行った所で、駅からさほど遠くないのに、木々は多く静かな住宅地だったと覚えている。「松風と冷たい井戸水」は、東京からの親戚には何よりの“おもてなし”だったようだ。いろいろな想いもあり、昭和 20 年以降の藤沢駅南口一帯の姿を思い出すままに書き留めてみた。

○ 奥田の田んぼはビル群に

昭和 12 年の地図を見ると東海道線南側、日の出町通り（府県道藤沢一鎌倉線）以南、東は境川、西は石上通りに至る一帯は「奥田」と呼ばれていた田んぼだった。戦後、昭和 20 年代後半の地図でも大きな変化は無い。

私の昭和 20 年から数年間の幼かった頃の記憶では、春先のレンゲ摘み、泥んこだらけになったオタマジャクシ捕り、そしてあぜ道を川（片瀬川）の方に行くと今の国道の 467 号線（通称片瀬県道）にぶつかるが、当時は車も少なく、その道路に面していた片瀬中学（現市民会館～前方の広場）横の小道を川まで行くと、何か遠くまで来たような気がして急いで帰ったことも頭のどこかに残っている。



旧片瀬県道 道奥のタワーが市役所、正面 2 階建ての建物は東京電力旧社屋



片瀬県道の先には江の島が見える（煙突、建物は醸造所のもの）

無い。この通りへ曲がる右側の角、林商店（現はやしや）は今でも残っていて洒落た台所用品等がショーウィンドウを飾っている。野崎眼科、栄湯などはどのあたりだったのだろうか。高座橋の南西の角に山之内病院が在り、その特色ある建物は印象深かった。今では新しい建物になったが以前の趣き深い洋館は、愛知県の明治村に移されるのでは・・・と耳にしたが定かではない。10年ほど前、明治村を訪れた際は見る事ができなかった。

橋の北東の角にはトミーの醸造所があったが、現在ではスーパーマーケットのオーケーなどが入った商業ビルが建ち、多くの買い物客やバス、車などで狭い道路は通りづらい。そして栄湯、家の風呂が壊れた折、裸電球のともる暗い砂丘の小道を横切って、石上通りからやっと着いたお風呂屋さん。行くのがイヤでイヤで……。その時の気持ちは今でも残っているのが不思議でならない。その暗い小道は再開発され、橋通りからイトーヨーカ堂横の通り、新川名橋まで続く大通りになっている。信じられないような変わり方だ。

○ 石上通り

駅前ロータリーから南へ延びる道（現ファミリー通り）は古い歴史を持つ。鵜沼の中南部（海岸、松が岡、藤が谷、桜が岡など）は今でこそ住宅地として落ち着いた町並みを見せるが、いずれも明治期以降に開発されており、それまでは砂丘などの高みのある砂原だった。鵜沼の古い集落は北西部の皇大神宮を中心とした一帯と、この石上（砥上）とに在った。この集落の南のはずれには片瀬川が大きく蛇行し、その川岸には渡舟場があって、“江之島詣”の旅人たちが藤沢宿か

ら南へ下って石上の集落を通り、この渡しで川を渡った。中には早舟でそのまま川を下って江の島まで行った人たちもいたようだが、多くは腰越を通して“江ノ島詣”をしたそうだ。明治期に入ると旧家が順番に舟銭をとって舟を出していたと聞く。石上の道もこの川岸まで。近くにはカワバタという屋号の家も残り、ホンケ、ニイヤ、マエ、セド等の屋号も見られて、かつての集落の中心は今の駅近くではなく、南に下った所だったことがわかる。

又、“コジキシラズ”と呼ばれた家もあり、道からちょっと入った所で周囲が藪だったことから“乞食でも分らない”という意で呼ばれていたそうだ。その頃の様子が偲ばれる。明治以降、周辺の耕地からの収穫物は、南部の開発と共に「アキナイ」と称して売りに出たり、青果市場へも出して現金収入を得ていたと聞いている。

戦後になるとだんだんと商店も増えてきたが駅から少し離れた所はまだまだ民家が多く、“雀のお宿”と呼ばれていた広い竹林をもった家も残っていた。駅近くの商店では柏屋酒店、中山眼科、そして特に忘れられないのが中央劇場が出来たこと。洋画中心の映画館でそれまで見たこともないような外国の風景、音楽、そして何よりも登場するスター達の魅力的な風貌、本当に心を奪われた。戦後 10 年も経たなかったこともあって、邦画だが「雲ながるる果てに」は特攻隊の人たちへの想いも重なって、高校生だった私は授業をサボって二度も観に行ってしまった。その頃が本当に懐かしい。この中央劇場も昭和 35 年から始まった「藤沢駅前南部地区土地画整理事業」のため姿を消した。

今でこそ石上通り入り口一帯は商業ビルや商店が建ち並び、一般の住宅も増えて



フジサワ中央劇場

ているが古くからの家々には砥上公園以南、かつてのナカムラやシタムラに多く、駅近くのカミムラは近年の駅利用と共に発展したことを思うと、石上の歴史や性格も理解できる。

○ 江ノ電が砂丘の下を走っていた

今は石上通りから西の方へ数分歩いた所に江ノ電が高架で走っている。藤沢駅を出てその高架になっているあたりは、昭和 30 年中頃までは砂丘が南北に横たわり、江ノ電の線路はその西側の下を砂丘と平行に走っていた（P2 地図参照）。

今では想像もつかない風景だが、藤沢駅を出た電車は左手の小高い砂丘と、右手の細長い三角畑との間をガタゴトと走っていた。昭和 20 年代は 1 輦で、その後は 2 輦が前後になって走り、昭和 31 年には連結車が出来て、現在では 4 輦連結で走っている。昭和 20 年代、家から駅まで行くのに線路の上を歩くのが一番近道だったので、枕木の上をトコトコと走り、電車の音がすると横へ降りた。行き過ぎて、又、枕木に戻った途端に警笛。確か続いて来る時は車輛の前方に○印のようなものを付けていた気がしたが、前の車輛だったか、後の車輛だったか忘れてしまった。今では線路の中を歩くななんて全く考えられないことだが。それが昭和 35 年からの「藤沢駅前南部地区土地区画整理事業」によって様々な工事がスタートした。この頃、ここに横たわっていた砂丘も崩され、その残土を使って奥田地区の田圃を埋め立てる整備工事が始まっている。写真にあるようにこの砂丘の南端「料亭たより」の在ったあたりには、神奈川県住宅供給公社を軸にし



砂丘と共同集合住宅ビル

た 10 階建ての共同集合住宅ビルが建設された。それは当時、駅南側一の高さでよく目立っていた。砂丘の上にあったカトリック教会も現在の位置に降りて来た。

○ 橋通り

駅南口広場の西から橋通りが南へ走っている。大正期に入ると鵜沼南部にも人々が定住するようになり、東京、横浜方面へ汽車で通う人たちもだんだんと増えてきた。この頃の交通手段は江ノ電（明治 35 年）、小田急（昭和 4 年）に依っていたが、住みやすい鵜沼から通勤する人たちによって好適な住宅地が求められていた。

※〔藤沢駅 一日乗客数平均〕

◆大正 10 年 4691 人 ◆昭和元年 6890 人 ◆昭和 10 年 8769 人

（藤沢市史 より）

駅からさほど遠くなく、しかも静かな住宅地として川袋（最初は低地の方ではなく、砂丘の方）が選ばれている。これは高瀬弥一氏が深く関係し、父・三郎氏が残した藤が谷（現 2 丁目付近）一帯 2 万坪の土地、家屋等を売却、川袋一帯を求めて宅地化に取り掛かったことが始まりのようだ。川袋の低地（片瀬川の曲流部）から砂丘に上った所。海辺の塩分、湿気も途中の林で薄められ、水捌けもよく、何より藤沢駅に近い。この宅地化を進めるには道路が不可欠であり、そこで計画されたのが橋通りとなった。当時藤沢駅から海岸方面への道路は求められてはいたが、藤沢町当局にはその計画は無く、そこで高瀬弥一氏が私財をはたいて取り掛かった。

まず前記の石上通りの中ごろから西へ向かい、江ノ電高砂停留所（現石上駅）を経て高瀬家門前までを整備、高瀬通りとした。次は藤沢駅から川袋の方に向かって南下する橋通り（大正 11 年）が出来た。高瀬通りの北側、橋通り西側の小高い砂丘一帯は分譲地として売り出されている。そして高瀬通りは更に西から南へ向かって鵜沼中心部へと延びていき、その道路造りに協力、土地を提供してくれた人たちの名をとって、当初は高瀬通り―上郎通り―宮崎通り―熊倉通り等と名を付けていた。今でも湾曲したりしているのは、このような事情があったのかと改めて納得した。南部への重要な交通路の先頭に立つ橋通り、この通りだけは土地提供者の名ではなく、古い地名「花立」から付けられたと聞いている。更に記しておく、高瀬弥一氏は水不足に悩む江の島に水を引こうと、自宅の庭に大きな井戸を掘り、パイプで江の島まで水を送り、更にもう一ヶ所、石上にも第二の井戸を掘っている。後の県営水道の原型となった。

この様にして整備されていった橋通り。南端～西の方一帯の砂丘地帯は高台でもあり、特に静かで整った環境にあった。戦後間もなくから御静養されておられた秩父宮雍仁親王は、昭和 28 年 1 月当地にて御逝去されている。橋通りに多くの皇族の方が自動車で行き、私達も道の端に立ってお見送りした。

昭和 20 年代の橋通りを思い出してみると、道の両側は日々の生活に必要なものを扱う店で、魚は〇〇、肉は△△、八百屋は□□、雑貨は、菓は・・・というように親しみやすく、だいたいの用事はここで足りていたし、御用聞きも来てくれた。商店がなくなると、その先は住宅地、駅に比較的近いものの、夜道は暗かった。

そういえば昭和 10 年代の初め頃か、家の前に俳優の佐分利信が住んでいたとのこと。サブリ、おかしな名前だったのでかすかに覚えている。その隣は桑野みちこさん（女優ではないそうだ）、やさしいおば様と物静かな御主人、その先の室伏さんには母のお使いで時折うかがったが、後になって室伏高信さん（評論家・著述家）のお宅と知った。フジ子さん、クララさんの美しいお姉さま方を思い浮かべている。その後だんだんと名前を知る方も比較的近くに住んでおられたりして、橋通り一帯の開発の意味もわかったような気がした。それが現在ではマンションなどのビルが次々建ち、かつての商店はすっかり姿を消してしまった。このビルだらけの橋通りを南へ進み、住宅地に入ると国の登録有形文化財に指定された旧後藤医院鵜沼分院が昭和期の風情を残して建っている。これも又売却の話があつて姿を消すところだったが、住民グループの努力もあつて保存が決まり、現在では藤沢市に寄附され「鵜沼橋市民の家」として多くの人たちに活用されている。近くに住んでいた頃からお世話になっていただけに、私もその保存・活用運動には一生懸命関わった。

○ 花沢町

橋通りより更に東へ、小田急線との間には花沢町の住宅地があり、駅近くは、やはりマンション等ビルが建ち並んでいるが比較的住宅が多い。かつてこの南の方の新田と呼ばれていた集落には大山道から続く江の島脇往還（石上へ出る）も通っていた。その更に南側には新田山と呼ばれていた鵜沼で一番高い砂丘もあったが、これが又、開発され住宅が建ち並んでいる。新田山の東は山裾に沿って新田道が海岸の方まで続き、かつては漁へ出る道として利用されていたそうだ。今でも道の西側には所々砂丘の高まりを感じながら、松の巨木とその季節には、あじさいも楽しめる松が岡公園へと続いている。



東海道線 通称「開かずの踏み切り」

これまで藤沢駅南口を東から西へと見て来たが、駅の南、北口との通行は唯一「開かずの踏み切り」に頼るしかなく、人や車も大渋滞、文字通りネックとなり不自由した。現在の地下道になる以前、踏切脇、東海道の線路に平行した“みのる百貨店”というマーケットが細長く奥に伸び、日用品を買い求める人で混雑していた記憶がある。昭和 37 年 12 月、付近の商店と共に火災で焼失してしまった。

その後、名店ビル、ダイヤモンドビル、緑屋、志澤百貨店、江ノ電百貨店（現在の小田急デパート）、十字屋（後にオーパ）等が駅を取り囲むようにしてビル化して行った。それが又々変わって現在の様になっている。中央に植樹帯があり、その周りを取り囲む様にしてバス、タクシー等の発着所、そして藤沢駅が階上駅となったため、各ビルを結ぶ空中歩道も出来た。これらのことに関し、市の整備計画の過程を見てみることにした。

終戦とほぼ同時に橘通りの近くに住み、昭和 30 年代後半から数年間、生活の変化と共に他市に移り、その後、又、鵠沼海岸、藤が谷に約 40 年以上住んでいる。それだけに地域の変化は目にしてきたつもりだが、駅南口の変わり方には驚

くばかりだ。いつ頃から変わり始めたのだろうか、昭和 30 年代人口の増加も加速してきたため、藤沢市として大規模な土地区画整理事業をスタートさせた。

＜藤沢駅前南部地区土地区画整理事業＞

昭和 35 (1960～) 年ごろ

- ・バス降車場の移転、この際多くの洋画ファンが通っていた藤沢中央劇場が南へ移転。
- ・石上通りと江ノ電の線路との間に在った細長い砂丘（前記）が崩され始めその残土で奥田の田園を埋め立てている。埋め立てはその後も続く。
- ・砂丘の南端に 10 階建ての共同集合住宅ビル建設、砂丘上のカトリック教会も現在地へ下りた。
- ・南口と北口を結ぶ「開かずの踏切」での混雑解消の為、地下道工事始まる。

昭和 40 (1965～) 年ごろ

- ・幹線街路整備がスタート、中央劇場前から鎌倉方面へ向かう「南口本通り」が新設、前記の日ノ出町の混雑が解消された。附近のビル化も進み、東京電力も現在地へ。
- ・片瀬中学校、片瀬山に移転(昭和 42 年 1967)。跡地に藤沢市民会館起工式(昭和 43 年 1968)
- ・イトーヨーカ堂脇の開発道路新設へ(昭和 44 年 1969) 新川名橋から南西に、奥田を斜めに横切り国道 467 号線を渡って、ヨーカ堂の南横から更に西へ向かい、江ノ電の高架をくぐって橋通りに至る大通り新設。現在は諸事情によってここまでだが、更に西へ伸び、藤沢警察署に至る予定だった



新設 南口本通り

そうだ。かつての裸電球がボーッと灯る砂丘を横切った細い道も、今では車が行き交う大通り。あの頃を想うと信じられない気持ちだ。

昭和 45（1970～）年ごろ

駅前から徐々に整備が進み、戦後建ち並んだ商店街も移動して整理事業も第二期工事に入る。

- ・江ノ電はビル工事のため西側（旧神中デパート前）に移転、単線の仮設駅舎が設けられる。撤去された旧駅舎の跡は、一時バス、タクシーのターミナルになる。売店で買ったカップラーメン「お湯を入れるだけでラーメンが出来るなんて？」と買い求めたことは覚えている。カップラーメンの出始めは、この頃だったのか。
- ・昭和 47（1972）年 第三期工事に入り、江ノ電の高架化、江ノ電ビルへの乗り入れ工事順調に進む。
- ・昭和 49（1974）年
 - 5月 23 日 江ノ電ビル竣工
 - 5月 25 日 江ノ電百貨店オープン
 - 6月 7 日 江ノ電 始発より新駅にてスタート

昭和 55（1980～）年

第四期工事 江ノ電藤沢駅が新橋上駅として完成。旧南口駅、小田急連絡橋を撤去

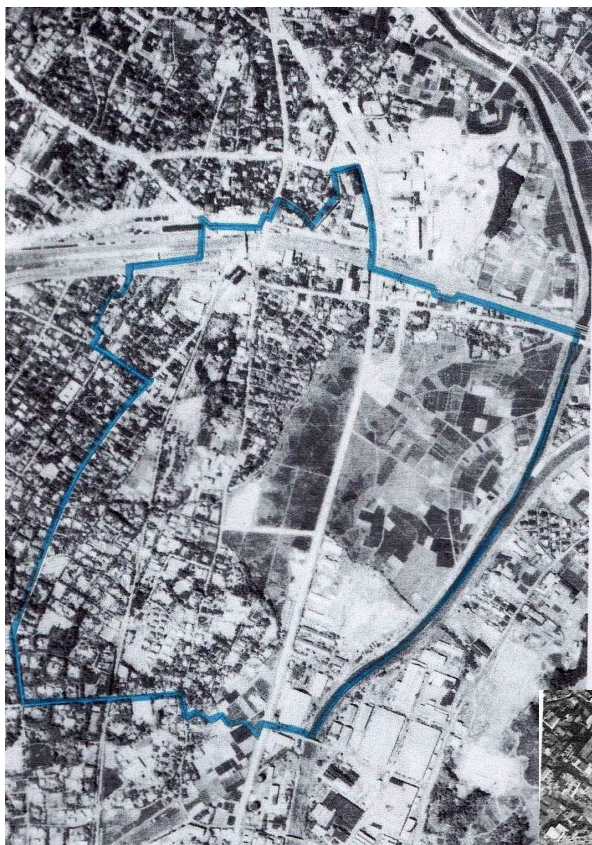
- ・昭和 58（1983）年 連絡歩道橋完成 南部土地区画整理事業完成

大きく変わった藤沢駅南口。多くの人たちには日常の光景になっているのだが、その歩みはいろいろとあった。そして今、又再整備計画もあると聞く。あるアンケートで南口のイメージを聞いたところ「ゴチャゴチャ」「デパートが目立つ」「湘南のイメージなし」等々、そして“何が大切か”では「湘南らしい個性」「買い物」「交通」などがあがったという。駅前の公園化を望んでいる人も多いようだ。これから又、生活に大切な場所としてどう変わってゆくのだろうか。

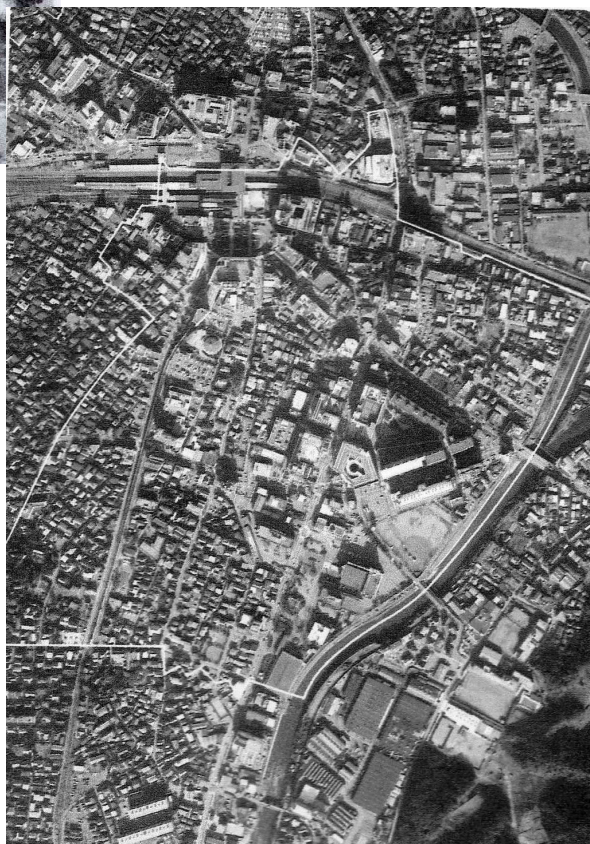
最後に南口に在って忘れがたい江ノ電旧藤沢駅舎の写真を添えておきたい。

（さとう かずこ）

藤沢駅南口周辺の区画整理



← 区画整理前



区画整理後 →



藤沢駅南口 江ノ電旧藤沢駅舎

【参考資料】

- 藤沢市資料
- 「ふるさと藤沢—市制施行 70 周年記念写真集」 郷土出版社
- 「まち」 藤沢市 いき出版
- 写真アルバム「藤沢市の昭和」 いき出版
- 「市制 50 周年記念歴史写真集 ふじさわ」 藤沢市
- 「地図に刻まれた歴史と景観」 藤沢市
- ふるさとの思い出写真集 昭和・大正・明治 藤沢市
- 鵜沼郷土資料展示室 資料
- 当時の新聞

芥川龍之介の中国旅行と「手帳」

神谷 祐太（会員）

「手帳六」「手帳七」

藤沢市文書館には、「葛巻文庫」と呼ばれる、芥川龍之介に纏わる貴重な資料のコレクションが所蔵されている。これは芥川の甥にあたる葛巻義敏氏によって保管されたものである。これらが戦災などによる散逸紛失を免れ、我々読者が現在読むことが出来るのは、彼の功績によるところが大きい。

さて、その資料群の中には、未発表の原稿や少年時代に作製された回覧誌などが含まれるが、本稿で着目するのは手帳である。その中でも、鵜沼公民館にそのコピーが保管されている「手帳六」と「手帳七」の重要性を指摘したい。

芥川龍之介は、その生涯において、わかっているだけでも合計 11 冊の手帳を書き留めている。それらの大部分は芥川にとって小説を執筆する際に、欠かすことの出来ない、いわば創作ノートともいうべきものである。しかしながら、本稿で取り上げる「手帳六」「手帳七」（以下、「手帳」に統一）は、他と聊か趣が異なる。なぜならば、これらは彼が大正 10（1921）年に中国を旅した際につけられた、いわば取材ノートともいうべきメモ書きだからである。

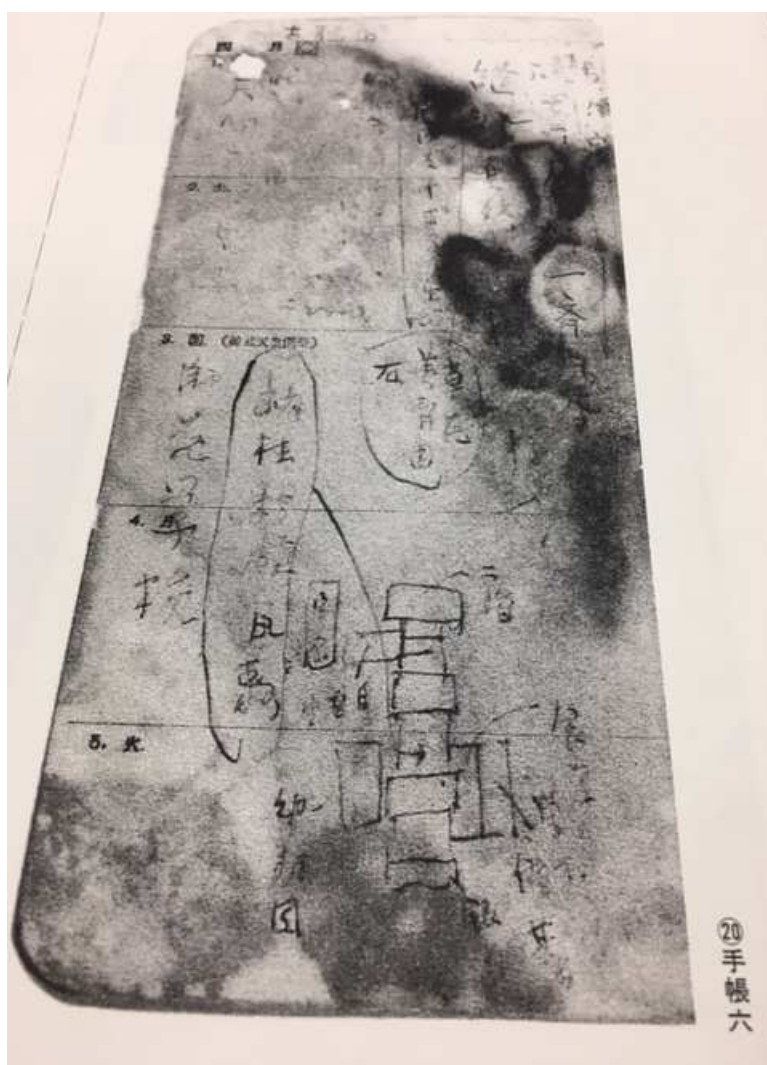
「手帳」の原本は、1968 年、世田谷区の葛巻義敏宅が火災に見舞われた折に、表紙やページのかかなりの部分が焼け焦げており、破損の度合いが著しい。加えて、芥川が読者を想定して書いた文章ではなく、あくまで旅先で付けたメモに過ぎないことも相まって、乱筆含めて判読困難な個所が少なくない。しかしながら、幸いなことに、現在、活字化された全文を読むことが出来る。『芥川龍之介全集』（岩波書店 1998 年）第二十三巻に原文を翻刻したものが収録されているからだ。

全集の「編集後記」の記述によると、「手帳六」については以下の通り。

原資料は一九二一（大正一〇）年、大阪毎日新聞社発行、上下 140 mm、左右 67 mm、右開きの手帳である。

続く「手帳七」について、次の通り。

原資料は発行年、発行元ともに不明、上下 124 mm、左右 65 mm、左開きと推測される手帳である。



「手帳六」のコピー（『藤沢市文書紀要』より）

それでは、これらの「手帳」の内容について触れる前に、芥川が行った中国旅行と、帰国後に発表された旅行記について、述べておかねばならない。

中国旅行と『支那遊記』

芥川龍之介は1921（大正10）年3月、大阪毎日新聞社海外視察員として中国に派遣される。『支那遊記』とは、この旅行の際に、芥川が記した日記をもとに、帰国後、同年8月17日から9月12日まで『大阪毎日新聞』及び『東京日日新聞』に連載された『上海遊記』と、翌1922（大正11）年1月1日から2月13日まで『大阪毎日新聞』に連載された『江南遊記』や、大正13（1924）年9月1日発行の雑誌『女性』に「長江」の題で掲載され後に改題された「長江遊記」、大正14（1925）年6月『改造』に掲載された「北京日記抄」、新たに付け加えられた「雜信一束」を合わせ、1925（大正14）年、改造社から出版された紀行文を指す。

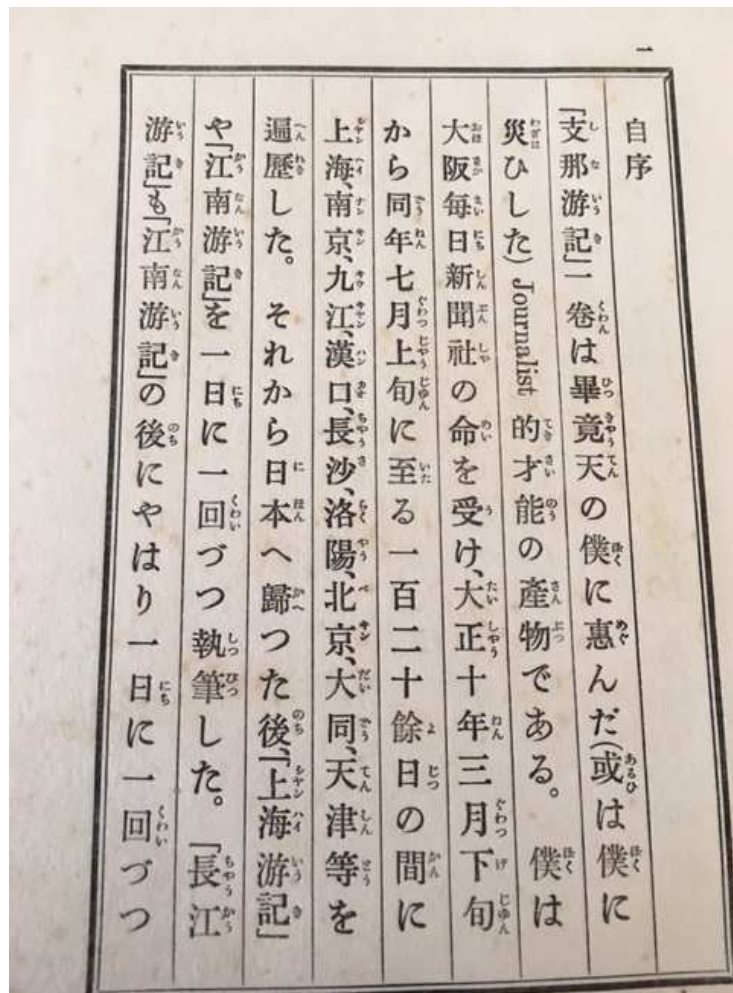
芥川は、東京の田端を発ち、毎日新聞社のある大阪へ行く。大阪港から門司港を経由し上海港に到着する。その後約4か月間、芥川は中国各地を訪問している。

上海では現地で暮らす毎日新聞社の関係者や、旧知の間柄であったロイター通信の記者トーマス・ジョーンズの歓待を受け、彼らと行動を共にしていた様子が記されている。しかし、道中、芥川は乾性肋膜炎を患い、病氣療養も含めて、約3週間上海に滞在している。

上海の日本人町にある里見病院に芥川は入院していたのだが、ここには芥川見たさに多くの見舞い客が殺到したようで、その時の様子を、芥川自身も、まるで天皇陛下がこられたような騒ぎと皮肉ながらに、知人へ宛てた手紙の中で触れているほどである。

病気が癒えた後は、中国南部の江南や蘇州を巡り、その後は鉄道に乗り北京を目指す。北京滞在時、妻・文の叔父であり、中学時代からの親友山本喜誉司の下を訪ねている。戦後ブラジルの日系人社会をまとめ上げた開拓者・コーヒー農園主として有名になる山本は、戦前は三菱の社員として、北京に渡り綿花栽培事業に従事していた事実はあまり知られていない。

さて、話を『支那遊記』に戻そう。改造社より出版された文庫版の序文において、芥川は「『支那遊記』一卷は畢竟（ひつきやう）天の僕に恵んだ（或は僕に災ひした）Journalist 的才能の産物である」と記しており、彼が訪れた先で見聞きした出来事をつぶさに書き記すジャーナリストとしての役割を、己に課していたことが分かる。



『支那遊記』（改造社、1925）自序

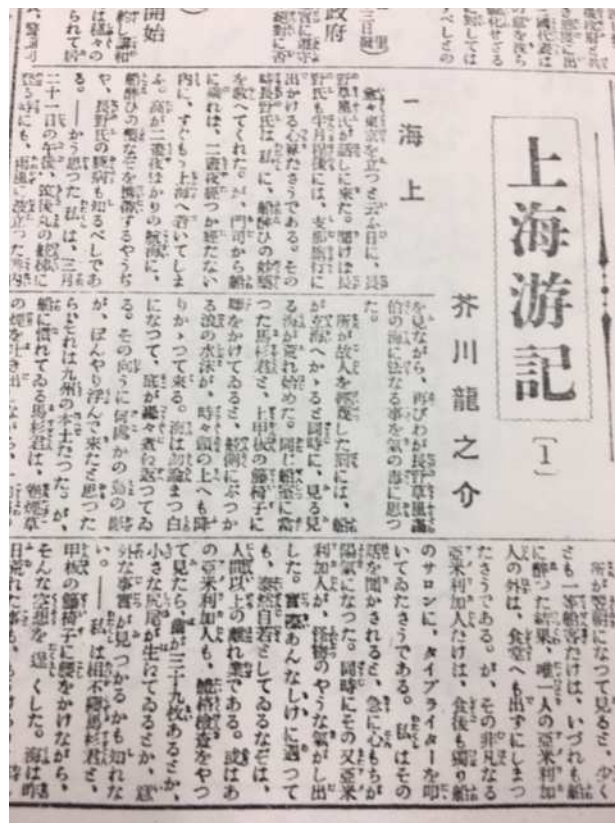
こうした芥川の中国を実直に見聞しようとした背景には、次のような前日譚がある。それは、芥川が東京を出立する前に行われた壮行会の席上にて、友人代表としてスピーチした人物が二人いる。里見弴と菊池寛だ。この二人の中国に対する意見が対照的なのである。里見は「支那へ行ったら、昔の支那の偉大ばかり見ずに、今の支那の偉大も探して来給え。」と芥川に激励の声を送っているのに対して、菊池は対照的に「今度の支那旅行ばかりは少しも自分は羨ましくない。報酬がなければ行くのは嫌である。」と皮肉たっぷりの言葉を浴びせている。おそらくは、彼ら二人の言葉を受けて、芥川は上述のジャーナリストとしての使命を己に

課すことで、里見の期待に応えようとし、なおかつ菊池の厭味への意趣返しを、それぞれ試みたのではないだろうか。

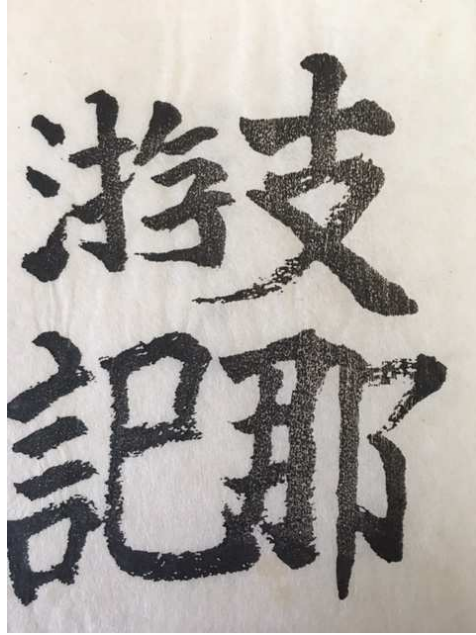
芥川が中国で如何なるものを見聞きしていたかを考察するとともに、芥川が若いころから中国の古典文学を愛読していた点を指摘されており、特に『西遊記』『三国志』『水滸伝』への興味の高さは、芥川研究家の間で指摘されている。

こうしたことは、芥川が中国へ渡る以前より、中国の寓話や怪談話から着想を得た短編小説を数本発表していることから伺える。具体的には『仙人』『杜子春』『聊斎志異』などである。芥川はその中で、幻想的な中国の風景を描いていることから、芥川が並々ならぬ関心を中国に対して向けていたとみていいだろう。

また、芥川がこの中国旅行から帰国したのちも、「将軍」「湖南の扇」など、中国を舞台にした短編小説を複数発表している点も注目し、彼が文学作品を通して得ていた中国に関する知識や情報を、実際の中国旅行を通して確認したいという目的もあったのだらうと推察できる。



「上海游記」連載第一回目（『大阪毎日新聞』1921）



『支那遊記』（改造社、1925）の表紙

しかしながら、こうした芥川の中国への関心の高さと裏腹に、当の中国人からの『支那遊記』の評価は決して芳しくない。中国人の作家巴金は、文中の主語として頻繁に用いられている「支那」の二文字を「日本」に置き換えて、問いただしてみても如何などと、辛辣なコメントを寄せているのが代表である。

日本の研究者の間でも、本作に対する評価は決して高くはない。本作は大正期の日本人が、急速な近代化・西洋化を希求したために表れた、あたかも西洋人が「アジア人」に対して向けるがごとき奇異の眼を獲得したという批判的な文脈の中で登場する作品である。つまり、俗に「支那趣味」と称される、ロマンティズムないし珍奇さを追求する当時の中国ブームに乗ろうとした作品という、これまた手厳しい評価である。

芥川と同時代の支那趣味の牽引役と目されるのが、谷崎潤一郎である。谷崎は大正期に二度、中国へ訪れている。1918（大正 7）年が彼にとって最初の海外旅行である。この時期に、谷崎はいわゆる「支那趣味」の小説や随筆を多く書き残している。この時、谷崎は朝鮮と北京を中心とした中国東北部を旅行している。そして、一回目の旅行から 8 年後の 1926（大正 15）年に、二回目の旅行として、今度は上海を中心とした中国南部を旅行している。

谷崎は、大正 7 年に行った一度目の中国旅行から帰国の後、「蘇州紀行」「廬山日記」「支那の料理」「秦淮の夜」などの文章を、新聞や雑誌に発表している。また、大正 15 年に行った二度目の旅行の後、『上海交遊記』を発表している。またその後も、『上海見聞論』という短い文章を発表している。

芥川は『南京の基督』と言う小説を、中国へ旅行する前年の 1920 年に発表している。つまり、この作品の中で描写されている中国の自然や風景は、彼の想像の中で育まれたものである。また、この小説の末尾に「本編を草するに当たり、谷崎潤一郎氏作『秦淮の一夜』に追う所尠駆らず。附記して感謝の意を表す」とあり、谷崎を大いに参考にしていた旨が、述べられている。

一方、谷崎は長編小説『鍵』（1956）の中で「僕ハフト、芥川龍之介ノ書イタモノノ中ニ、中国ノ婦人ハ耳ノ肉ノ裏側ガ異様ニ色ガ白クテ美シイト云ッテイルノヲ読ンダコトガアルノヲ思イ出シタ。」と書いている。ちなみに、これこそ『支那遊記』を指している。このように、奇しくも同じ鵠沼縁故者が「支那趣味」と言う共通点で結びつくのである。

芥川は谷崎潤一郎からの影響を告白しているが、一方で芥川は横光利一に影響を与えている点も見逃せない。死の直前に芥川は横光に対して「君は上海へ行くべきだ。」と言いつけている。この言葉に従い、横光は 1928 年（昭和 3）年に上海へ渡航し約一か月滞在する。そのときの体験をもとに、横光は帰国後、『改造』に小説『上海』を連載している。



芥川龍之介中国旅行の旅程

「手帳」と『支那遊記』

それでは、「手帳」のメモをもとに、いかにして芥川が旅行記『支那遊記』を執筆したのか、一例を紹介しよう。以下の手帳のメモは、芥川が同行者の島津四十起氏と共に蘇州城内にある孔子廟を訪れた際のものである。

孔子廟。門。池。杉。禮門 black. 石獅。池。石橋。青衣、テン足の老婆。女子、アバタ。塔。桑。門。毒ダミノ花。鐘。太鼓（大中小）。廊。煉瓦。廊。大イテフ、二三本。石階、龍。大成殿。群青へ白。赤瓦。大廊。黃柱。黃壁。萬世師表。朱金。臭氣。蝙蝠の糞。異臭。

これらの取り留めもない単語の羅列が、『支那遊記』の中ではどのように活かされたのだろうか。少々長い引用となってしまうが、以下に紹介したい（以下、引用）。

孔子廟へ來たのは日暮れ方だつた。疲れた驢馬に跨りながら、敷石の間に草の生えた、廟前の路へさしかかると、寂しい路ばたの桑畑の上に、薄白い瑞光寺の癡塔が見える。（中略）

黒い禮門を通り過ぎてから、石獅の間を少し歩むと、何とか云ふ小さい通用門がある。その門を開けて貰ふ爲には、青服の門番の上さんに、二十錢銀貨をやらなければならない。が、その貧しさうな上さんが、痘痕（あばた）のある十ばかりの女の子と一しよに、案内に立つ所は哀れである。我我は彼等の後から、毒だみの花だけ灰白い、夕濕りの敷石を踏んで行つた。敷石の盡きる所には、戟門と云ふのだらう、大きい門が聳えてゐる。名高い天文圖や支那全圖の石に刻まれたのも此處にあるが、あたりに濡つた薄明りでは、碑面もはつきりとは見る事が出来ない。唯その門をはいつた所に、太鼓や鐘が並んでゐる。甚しいかな、禮樂の衰へたるや。今考へると滑稽だが、私はこの埃だらけの、古風な樂器を眺めた時、何だかそんな感慨があつた。

戟門の中の石疊みにも、勿論茫茫と草が伸びてゐる。石疊みの南側には、昔

の文官試験場だつたと云ふ、廊下同様の屋根續きの前に、何本も太い銀杏がある。我我は門番の親子と一しよに、その石畳みのつきあたりにある、大成殿の石段を登つた。大成殿は廟の成殿だから、規模も中中雄大である。石段の龍、黄色の壁、群青に白く殿名を書いた、御筆らしい正面の額——私は殿外を眺めまはした後、薄暗い殿内を覗いて見た。すると高い天井に、雨でも降るのかと思ふ位、颯颯たる音が渡つてゐる。同時に何か異様の臭ひが、ふんと私の鼻を打つた。

「何です、あれは？」

私は早速退却しながら、島津四十起氏をふり返つた。

「蝙蝠ですよ、この天井に巢を食つてゐる。——」

(引用、以上。尚、下線は筆者による。)

旅先でとった走り書きをもとに、いかにして、芥川が旅愁溢れる文章を執筆したかが、お分かりいただけるだろう。これらの手帳と旅行記の内容の比較検証あるいは細部の同定作業にこれ以上ページを割くのは忍びなく、今回はその一端を披露にするにとどめる。

「手帳」と鵠沼時代

最後に、文学研究や支那趣味を考察するためのテキストとして用いられることの多い「手帳」及び『支那游記』から、中国旅行からちょうど5年後にあたる鵠沼時代につながる一つの事実を指摘したい。

それは芥川が中国旅行の際に、阿片中毒者と遭遇していたということである。すでに知られている通り、1926（大正 15）年、鵠沼逗留時の芥川は医師でもある斎藤茂吉へ阿片エキスを無心する手紙を書き、晩年の作品には、阿片常用からくる幻覚症状が指摘されるものすらある。彼は阿片常用に対して危機感を抱いてはいなかったのだろうか。「手帳」には以下の記述がみられる。

阿片をのむ故老いたり。

上海で出会った林黛玉と言う名の芸妓の容貌を記した一文にその表現はみられる。小柄であるため、実年齢よりもはるかに若く見える女性が、阿片を常用したために容貌が老いてしまったという話を記録している。また、上海を旅した際に、阿片窟が半ば公然と営業されている様子に驚いたことが『支那游記』の中でも述べられている。直截的な表現や記述はないが、芥川が阿片に関する知識について、この中国旅行の際に得ていたとみていいだろう。

芥川にとって、阿片中毒者の末路を直に見ていながらも、猶、阿片に頼らざるを得なくなっていた己の現状は、実母の発狂を目の当たりにしたため自身の将来に不安を募らせたことや、義理の兄の負債を負ったことなどその他も諸々の心労と並び、自殺を決意させた原因の一つだったのではないだろうか。

(かみや ゆうた)

主要参考文献：

芥川龍之介『上海游記・江南游記』（講談社 2001 年）

芥川龍之介『芥川龍之介全集』第十九卷（岩波書店 1997 年）

芥川龍之介『芥川龍之介全集』第二十三卷（岩波書店 1997 年）

櫟原直樹『藤沢市文書館所蔵「葛巻文庫」と芥川龍之介資料——小学時代の回覧雑誌「日の出海」について——』（『藤沢市文書館紀要』1997 年 3 月）

高三啓輔『鵠沼・東屋旅館物語』（博文館新社 1997 年）

谷崎潤一郎『上海交遊記』（みすず書房 2004 年）

民俗学者 丸山久子 伝

岡田 哲明（会員）

はじめに

鵜沼に住んだ女性で特筆すべき人物を五人挙げよ、といわれたら私は以下の五人を挙げたいと思う。

一人目は明治・大正時代に一世を風靡した女流作家・内藤千代子である。彼女については故杉本辰夫会員が作品の復刻をされた。忘れ去られようとしていた内藤千代子の小説は総合市民図書館、鵜沼市民図書室で読めるようになった。

二人目、三人目は、旅館東屋を経営し、多くの作家が逗留して後世に残る作品を執筆する環境を提供した長谷川えい・長谷川たか姉妹である。東屋と、この二人については高三啓輔元会員が『鵜沼・東屋旅館物語』と題して博文館新社から単行本を出版（1997年11月25日発行）されている。

四人目は鵜沼慈教庵（今の本真寺）を創建し、災害ボランティアの先駆けともいえる被災民救済活動に生涯を捧げた颯田本真尼で、鎌倉光明寺管長をつとめられた藤吉慈海師が書かれた『颯田本真尼の生涯』春秋社（1991年12月10日発行）に、その偉大な業績は紹介されている。また会誌『鵜沼』112・113号に藤吉氏の著述の補遺ともいえる内容を私が紹介した。

五人目が民俗学者・丸山久子である。彼女は19歳から毎夏避暑に、その後は37歳から77歳で没するまでの40年間を鵜沼商店街と小田急線の間「アンの部屋」から有田商店の脇へ抜ける細い路地の中ほど（鵜沼海岸 2-2-17）に住んだ。

丸山久子について知る人は少ないと思う。私も彼女の妹、太田桂のご息女から女性民俗学研究会発行『女性と経験』第27号「特集・丸山久子の生きた道」（2002年12月25日発行）を拝借して彼女の業績を知った。本稿は同誌から多くを引用した。執筆された中島恵子、糸智子、北村澄江各氏に感謝を申し上げたい。



丸山 久子

丸山久子文庫

藤沢市文書館に「丸山久子文庫」があるのをご存じだろうか。かつて藤沢市文書館には「丸山」の名を冠する二つの寄託資料があった。

一つは平成 11 年 9 月に松本市文書館に移管された「丸山家文書」であり、もう一つが「丸山久子文庫」である。

「丸山家文書」は昭和 53 年、丸山が親交のあった高野修・前藤沢市文書館長とともに彼女の実家（長野県松本市笹賀）へ行き、蔵に保存されていた古文書類を自身の住む藤沢に高野の運転するトラックで搬送した。ダンボール 70 箱に及ぶ史料は、遊行寺の宝物館に一時保管されたのち藤沢市文書館に寄託、目録が作成され 21 年もの間、保管されていたが、松本市に文書館が設立されたのを契機に移管されたもので、松本市文書館の収集資料の中核をなす貴重な資料である。

「丸山久子文庫」は久子の蔵書、雑誌、原稿、写真、地図、研究資料、フィールドノート、切り抜き記事、日記、書簡など膨大な資料で、久子没後に寄託されたが 10 年余の間、諸般の事情から未整理のままであった。平成 10 年の暮れ、漸く整理作業が始まり、蔵書は書棚に収納され、その他は保存用段ボール箱 51 個に分類して納められて平成 13 年に一応の整理を終わったが、現在はすべて未公開である。公開できる資料を選別して一般に開放して欲しいものである。

生い立ち

丸山久子は明治 42(1909)年 2 月 2 日、長野県東筑摩郡笹賀村大字神戸（ごうど）472 番地（現：松本市笹賀）で明治 40 年に結婚した父丸山彦門（ひこと：明治 7 年生）と、母（加藤九一郎・ふみの三女）いはふ（明治 18 年生）の長女として生まれ、久（ひさ）と命名された。

丸山家は戦国時代から続いた旧家で、代々一族で神戸の村役人をつとめていた。先祖の丸山将監陳友を祀った「元勲神社」が屋敷神になっていた。幕末期に百姓代をつとめた角之丞暉始は書に親しみ詩歌を吟ずる人で、異国船の来航、善光寺大地震、天保の飢饉などの見聞録を書いている。角之丞の子の昌三郎盛蕃は維新前まで名主をつとめ、「御用書留」や代参日記「三峰山道中記」を残していて、これらは「丸山家文書」として松本市文書館にすべて収蔵されている。昌三郎の息子、角平は明治の初め副戸長をつとめた。角平の次男が彦門である。

彦門は上京して蔵前の東京高等工業学校に学び、のちに芝浦製作所に入社し妻子を郷里に残して設計技師として勤務した。今でいう単身赴任である。大正初め

にはアメリカに派遣され、ゼネラルモーターズで研修を積んだ。

大正4年、笹賀尋常小学校に入学した久子は9月に一家で上京し麻布本村町に居をかまえ本村尋常小学校に転校した。以後、空襲で家を焼かれるまでここに住んだ。大正10年、東京府立第三女学校入学、松岡雪子（松岡静雄・初子の長女）と同窓であった。大正15年、同校卒業、高等科入学国文学を専攻する。

昭和3年3月高等科卒、肋膜炎を患い、6月父は子供たちの保養のために鵜沼海岸（現：鵜沼海岸 2-2-17）の土地を入手し別荘を建てた。久子は弟妹達の夏休みの間一緒にここで毎年過ごした。久子は鵜沼の別荘からわずか500mのところ第三高女で同級だった松岡雪子の家があることを知る。雪子の父・松岡静雄（海軍大佐、言語学者、民俗学者、柳田国男の弟）は神楽舎（ささらのや）という私塾を開いていて湘南国語研究会という古典や民族思想の勉強会をしていた。久子は神楽舎へ足繁く通うようになる。後年、柳田のもとで研究作業に従事するようになったのも、これが機縁となった。12歳年下の妹、太田桂の回想では、神楽舎へ行ったまま久子の帰りが遅いと2人の兄と3人で松岡の家の近くまで行き、声を揃えて「マルヤマヒサ、ハヤクカエッテコイ」と叫んで、先生の機嫌を損ねたと、後から姉にきつく叱られたという。桂が小学校6年のころの話である。

昭和9年25歳の時、文部省中等教員国語科検定試験合格。昭和13年8月3~4日、國學院大學夏期講座で初めて柳田国男の講演「国語の将来」を聞いて民俗学に関心を持ち、柳田に師事するようになる。昭和17年本格的に柳田の仕事を手伝うようになり原稿の「浄書」や文献から資料を写す「写字」が多かった。昭和19年2月、麻布カトリック教会で洗礼をうけた。クリスチャンネームはマリア。

昭和20年5月25日、麻布の家が空襲で全焼、埼玉県児玉に疎開、やがて終戦、翌昭和21年1月に父と弟を児玉で亡くし、その春に病身の母と共に鵜沼の別荘に住んでいた妹・太田桂の家族と同居する。久子37歳である。以後ずっと鵜沼に住み続けた。昭和60年2月体調不良を訴え藤沢市民病院に救急入院、脳梗塞と診断され長寿園病院を経て9月に県立七沢リハビリテーション病院脳血管センターに転院したが、昭和61年3月11日77歳の生涯を閉じた。

鵜沼での40年間のうち成城に住む柳田国男が昭和37年に没するまでの16年間は毎日のように師のもとに通って民俗学の研究を重ね、一方では住み付いた藤沢や神奈川県（神奈川県）の風習、民間伝承などを丹念に採集研究し発表した。

鵜沼における丸山久子の業績（県外の研究発表を除く）

- 昭和 22 年 鵜沼の自宅で子供習字教室を開く
- 昭和 23 年 4 月、大和学園中学校社会科教師
『日本昔話名彙』丸山久子・池田弘子共著
- 昭和 24 年 1 月、大和学園中学校退職
- 昭和 26 年 柳田国男監修『民俗学辞典』刊行。執筆者の一人となる
3 月、母いはふ死去、4 月、民俗学研究所所員として勤務
9 月、鶴見の橘学園で作文教師として勤務
- 昭和 29 年 4 月、相模民俗学会成立 初回から参加、以後、評議員・理事となる
『民俗学手帳』刊行
- 昭和 30 年 『総合日本民俗語彙』全 5 巻「児童、昔話、伝説」を執筆
- 昭和 33 年 鵜沼ノート「女性と経験」
神奈川県『日本民俗学体系 11－地方別調査研究』刊行
- 昭和 34 年 日大藤沢高校図書室勤務、
7 月相模民俗学会例会「昔話の異類婚姻」について発表
『講座日本風俗史 11』に「出産をめぐる習俗」を執筆
- 昭和 36 年 『遠藤民俗聞書』藤沢市教育委員会発行。企画、調査、執筆、編集を丸山が中心になり一年かけて出版
- 昭和 37 年 2 月神奈川県立図書館で「食物の民俗」について講演
8 月 8 日、柳田国男死去、享年 88 歳
- 昭和 38 年 藤沢市教育文化研究所研究員となる
『神奈川の歴史－県下の民俗篇 下』に「子供の遊びと唄」を執筆
- 昭和 39 年 藤沢市文化財保護委員となる
『藤沢民俗文化 1』に「採集こぼれ話、田螺の童唄、道陸神祭見学記（鵜沼宮の前）」執筆、編集を担当
市内民具収集に取り組む。
- 昭和 40 年 “遠藤の盆踊り” が丸山の尽力で復活、市民俗芸能第 1 号に指定
『藤沢民俗文化 2』に「藤沢のわらべうた・食生活の思い出・だいのこんごう考」執筆
『わが住む里 16』に「お精霊様の買い物」を執筆
- 昭和 41 年 『藤沢民俗文化 3』に「民具蒐集について」を執筆
『藤沢市文化財調査報告書 3』に「藤沢市の盆おどりとその周辺」を

執筆

昭和 43 年 『相模川流域の民俗－神奈川県民族調査報告 1』に「衣服、食物、婚姻、童戯」を執筆

『藤沢市文化財調査報告書 4』に「藤沢市の人生儀礼」を執筆

『藤沢市文化財調査報告書 5』に「藤沢の歴史と民俗」を執筆

『藤沢民俗文化 4』に「高座鎌倉拾参ヶ浦漁業取調」を解説

『神奈川文化 159 号』に「お施餓鬼と灯籠流し」を執筆

12 月郷土史の功労により神奈川県表彰を受ける

昭和 44 年 『串川、中津川流域の民俗－神奈川県民族調査報告 2』に「婚姻、童戯」を執筆

藤沢市中央図書館婦人読書会「さるびや」に「昔話によせて」執筆

昭和 45 年 藤沢市教育文化研究所所員となる

『藤沢市文化財調査報告書 6』に「藤沢の年中行事」を執筆

『相模川下流域の民俗－神奈川県民族調査報告 3』に「婚姻、童戯」を執筆

『神奈川県史民俗資料調査報告 1』に「小田原市山王原の民俗・婚姻、童戯」を執筆

昭和 46 年 『三浦半島の民俗 1－神奈川県民族調査報告 4』に「婚姻、童戯」を執筆

『藤沢民俗文化 7』に「漁村古老座談会記録」「茅ヶ崎市南湖の地引」を執筆

『わが住む里 23』に「藤沢のむかし話採録」を執筆

昭和 47 年 3 月藤沢の口承文芸、昔話、伝説、世間話の採集を開始

『藤沢市文化財調査報告書 7』に「藤沢の年中行事」を執筆

『三浦半島の民俗 2－神奈川県民俗調査報告 5』に婚姻、童戯を執筆

『神奈川県史民俗資料調査報告 2』に「大和市福田の民俗」執筆

6 月茅ヶ崎市民講座「ナリモノとけずりかけ」講演

12 月神奈川県立博物館「婚姻について」講演

昭和 48 年 子供たちに地元の民話を伝えたい丸山の思いが『ふじさわのむかしばなし第 1 集』絵と文・黒崎義介となり藤沢市教育文化研究所から刊行
第 2 集・昭和 51 年、第 3 集・昭和 54 年に刊行される

『藤沢の民話 1』中島恵子と共著

- 『藤沢市文化財調査報告書 8』に「藤沢の年中行事」を執筆
 『神奈川県史民俗資料調査報告 3』に「海老名市杉久保の民俗」執筆
 5 月藤沢市民会館「藤沢の民話」を語る集いで講演
- 昭和 49 年 『神奈川県史民俗資料調査報告 4』に「藤沢市葛原・用田の民俗」を執筆
- 昭和 50 年 『藤沢市文化財調査報告書 9』に「藤沢の年中行事」を執筆
 『藤沢の民話 2』中島恵子と共著刊行
 『藤沢市文化財調査報告書 10』に「白旗神社の湯立神楽」を執筆
 6 月東洋大学「近代都市化地域の昔話調査について」藤沢での昔話採集調査をもとに講演
- 昭和 51 年 『昔話一研究と資料 5』に「近代都市化地域の昔話調査の経験」を執筆
 『日本民俗学の視点』に「誕生祝」を執筆
 『ふるさと遊びの事典』に「自然と遊び」を中島恵子と共著
- 昭和 52 年 『神奈川県史 各論編 5 民俗』に「食物、婚姻、厄年と年祝い、童戯、昔話」を執筆
 『藤沢市文化財調査報告書 12』に「八日雑煮について」を執筆
 『神奈川県のみかし話』「オオカミの恩返し他 13 話」収録
 文化財保護委員として藤沢市から表彰される
- 昭和 53 年 3 月藤沢市教育文化研究所を退職
 『藤沢市史研究 11』に「民俗調査をするにあたって」を執筆
 『藤沢の民話 3』中島恵子と共著刊行
- 昭和 54 年 成城大学「神奈川県下の盆唄」講演
 『評伝 柳田国男』共著に「炭焼き日記の頃」を執筆
- 昭和 55 年 『藤沢市史 第 7 巻 文化遺産・民俗編』に「信仰と民間療法」「民俗芸能」「伝説・民話・わらべ唄」を執筆
 藤沢市教育文化研究所編『遠藤の昔の生活』執筆
- 昭和 56 年 藤沢市文化財保護委員を辞任
- 昭和 57 年 2 月川崎市「ハレとケの衣料について」講演
 3 月神奈川県立博物館「女性と民間伝承」講演
 『藤沢のみかし話』刊行
 藤沢市から文化貢献者、県教育委員会から文化功労者として表彰

昭和 58 年 3 月 打戻の宮治家婚礼衣装・式服など調査

7 月～11 月 藤沢公民館で 10 回にわたり「藤沢の昔話」講座

『かながわのむかしばなし五十選』 共著

昭和 59 年 『藤沢の昔話』 監修

『足柄の民俗 1 中井町・大井町ー神奈川県民俗調査報告 12』に婚姻、
童戯を執筆

藤沢市文化財調査として 8 月「高倉の一夜地蔵」9 月「鵠沼念仏講」

「石川南部念仏講中」の調査を実施

昭和 60 年 2 月 体調を崩し緊急入院

昭和 61 年 3 月 11 日 死去、享年 77 歳、久子はクリスチャンであったが遺骨は、
松本市笹賀長照寺内、丸山家累代の墓所に葬られている。

おわりに

丸山久子の生涯の前半は柳田国男に、
後半は神奈川県での民俗調査に、終始したといえる。

民俗学は、食物、炊事、家事、婚姻、
出産、育児、衣料など女性目線が不可欠なジャンルがあることを熟知した柳田は女性研究者を多く育てたが、なかでも丸山久子に寄せた信頼は絶大であった。柳田は大正 13 年から昭和



柳田国男と門下生（中列右から 2 人目が久子）

5 年まで朝日新聞の論説委員をしていた。記者が使う原稿用紙は B6 判の白紙で、
およそ 15 字×6 行、1 枚あたり 90 字前後であった。朝日を去ってからでも柳田は
原稿を書くときこのスタイルを変えず、出版社に渡すには必ず 200 字詰の原稿用
紙に浄書しなければならなかった。しかも柳田の書く文字は非常に癖があって、
癖を知らないと判読、浄書が出来ないが丸山にはそれが出来た。浄書するのは三
女の堀三千さんか丸山に限られていた。柳田の多くの著作は丸山の協力なしには
出版出来なかったといっても過言ではない。

丸山久子は柳田にとって、愛弟子であり、有能な秘書であり、協力者であり、
よき理解者、後継者であった。

（おかだ てつあき）

Yさん

テレビの大相撲生中継を見ていて、観客の中にすでに死んだ知人の姿を見つける話が『鵠沼』107号今井達夫遺稿「五百阿羅漢」に出てくる。

何年前だったろうか。一月五日が土曜日にあたった年があった。いつものように駅からルミネビルへ急いだ。教室のある階でエレベーターを降りると、ロビーの灯りは消えシャッターが下りていてカルチャーセンターはまだ休みのだった。

自分の迂闊さをよそに、今日ここへ来たのは私だけなのだろうかと思った。

駅のコンコースへ戻ると人々が忙しそうに行き交っていて、その雑踏の中に見慣れた人を見つけた。茶のオーバーコート、黒縁眼鏡、見覚えのある書類鞆、同じ鵠沼に住むYさんだ。あの人も間違えて来たのかと思うと、可笑しくて頬がゆるんだ。近づいて「今日は休みよ」と教えてあげて、お茶に誘おうと思った。

見失うまいと人混みの中を注視しているうちに、Yさんは暮の十二月に亡くなったのだったと気づいた。みんなでお葬式にも行ったではないか。

我にかえって、あたりを見まわすが、もうYさんの姿も似たような人も見つかることは出来なかった。見間違いだったかと思ったが、やはり、あれはYさんだったのだと、思えて来た。

もしあのとき、彼の死に気づかなければ、きっと一緒にお茶の時間を楽しんだに違いない、という気がしてならない。(M.H)

昔の記事を読み返してみると・・・

古い額の裏板を外したら昭和44年12月25日付の広報「ふじさわ」が出て来た。今秋は衆議院議員選挙があったが、記事を見るとこの年もそうであった。

見出しに「よく見 よく知り よく考えて、投票日は12月27日 あなたの一票で明るい政治」とあり、本文には前回(昭和42年1月29日)の藤沢市の投票率69.81%は全国平均を4.18ポイント下回ったこと、前回よりも有権者が15,000人増えたから1票を無駄にしないように、と投票を促している。昨今の低投票率には考えさせられるものがある。また、この選挙からTV政見放送が始まったこと、票の集計に電算導入が始まったことなどが記事になっていて興味深い。

別欄では、市の人口221,005人、男112,408人、女108,597人、世帯数58,813というデータが記載されている。今の人口(10月1日現在)428,837人、男212,118

コーヒースレーク Coffee Break コーヒースレーク Coffee Break コーヒースレーク

人、女 216,719 人、世帯数 185,282 と比べると 48 年間に人口はほぼ 2 倍に、世帯数は 3 倍強になり 1 世帯当たりの人数が 3.76 人から 2.31 人に減少している。

これらの数字は土地の細分化、核家族化、少子高齢化が進んだことを如実に物語っているといえるであろう。(T.O)

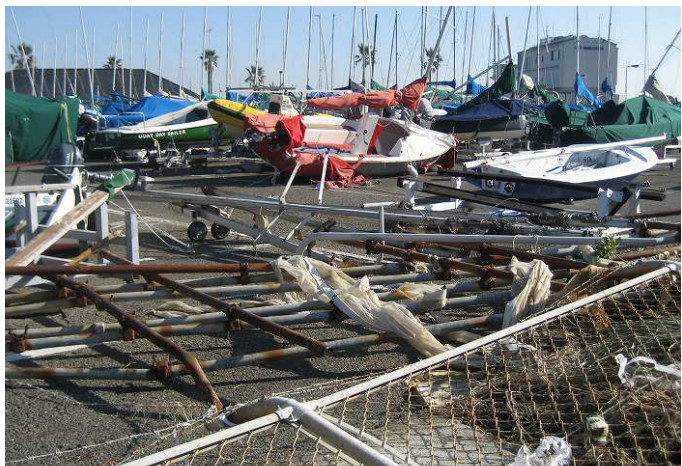
台風 21 号 江の島ヨットハーバーを襲う

10 月 23 日未明に来襲した台風 21 号。鵜沼あたりではさほど被害はなかったように思え、ヤレヤレと云う思いであったが、TV の画面に映し出された江の島ヨットハーバーの様子には度胆を抜かれた。6 m 強の防波堤を越えてくる高波は、普段の江の島の海を知っているものにとって信じ難い光景であった。波の高さは 10m を越えていると報道されていた。

数日後、ヨットハーバーに行ってみた。海沿いに自転車を走らせると西空には冠雪の富士山が姿を見せ海は穏やかになっていた。ただ西浜に打ち上げられたゴミは莫大で自動車のタイヤが何本も転がっていた。やはり海岸には相当な波が押し寄せていたのだ。

ヨットハーバーには特に交通規制もなく難く入れた。灯台のある先端の方に行ってみたが大した被害状況のようにはみえない。逆に堤防の付け根、島寄りの方へ行くと、金網の塀は全て倒れ外灯もくの字に曲がっている。駐車場のアスファルトも一部めくれ、堤防寄りに置かれたヨット数隻が壊れている。

2020 年のオリンピックにセーリング競技会場として再度、使われる江の島ヨットハーバー。今回破損したヨットの中に日本代表選手のヨットも含まれていたとのこと。2020 年オリンピック会期中にこのような台風が来ないともいえず、今後どのような対策をとるか、開催地・藤沢市も頭の痛いところだろう。(弥)



コーヒースレーク Coffee Break コーヒースレーク Coffee Break コーヒースレーク

小田急 鵠沼本町驛

—鵠沼賀来神社境内にある道標—

有田 裕一（会員）

江ノ電・鵠沼駅前に賀来神社がある。駅から最も近い位置の本殿への脇階段の昇り口の玉石垣の中段に、地上高 87cm、幅 13cm×13cm のコンクリート製の標柱がある。その姿は写真 1、2 の通りであり、下部が地中に埋まっている。



写真 1 右面 小田急鵠沼本町驛ニ到ル



写真 2 正面 藤ヶ谷橋ヲ経テ海岸ニ到ル

刻面の文字は、

【正面】 藤ヶ谷橋ヲ経テ海岸ニ到ル

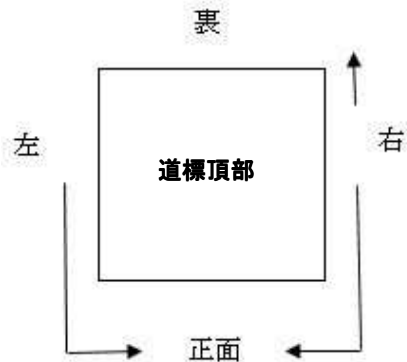
【左面】 江ノ島電停前ヲ経テ藤沢ニ到ル

【右面】 小田急鵠沼本町驛ニ到ル

【裏面】 昭和三年御大典記念

とあり、その上部には方向を示す文字の補完のために柱を巻くように → が彫られている（図 1）。

この道標は、この位置では方向に矛盾がある。実はこの道標は元々この位置にあったものではない。今から 23 年前、平成 6（1994）年 1 月まで、松が岡 2 丁目の道路の角（地図 1 の★）にあった。その当時の健在の姿(写真 3)と何らかの理由で倒れてしまった姿(写真 4)をたまたま撮影したものがあるので次頁に示しておく。



倒れた道標は、長い間そのまま横たわっていたので、筆者はこのままではいずれゴミとして処分されると思い、当時、賀来神社の総代であり筆者と同業のN氏にお願ひし、賀来神社の正面の石段右側の玉石垣の上に横たわったまま保管してもらった。

これが平成 16(2004)年、元交番の左側にサーフボード型の道祖神が建てたられ、一緒にその左方に建てられた模様である。この道標を元の位置に置くと刻面の文字・矢印は初めて納



地図 1 江ノ電 鶴沼駅近辺

得出来る。そこで気になるのは右面の「小田急鶴沼本町驛ニ到ル」で、鶴沼本町駅は存在しない、本鶴沼駅を指すと思われる。

これは裏面の昭和三年御大典記念の文字から建立の年が、小田急江ノ島線が開通する 1 年前のことであり、駅名を鶴沼にすると、既に江ノ電の鶴沼駅があり、海側には鶴沼海岸駅の予定があるので、むしろ古くから発展して来て、鶴沼本村に近い駅ということで「鶴沼本町驛」が候補に挙がっていたのではないかと。

この様に既存駅名との兼ね合いで命名したと思われる例は、本厚木駅（相模線・厚木駅が既にあった）、藤沢本町駅（東海道線・藤沢駅があった）にも見られる。昭和 4（1929）年に小田急が全面開通した当時の大野信号所を通信学校駅とし、昭和 16（1941）年、相模大野駅とした。同年、東林間都市駅を東林間駅に、中央林間都市も中央林間駅に、昭和 33（1958）年、新長後駅が長後駅になった。

このように駅名の命名は、時に変更になる例はよくあるようである。



写真3 松が岡2丁目道路角に立つ道標



写真4 倒れてしまった道標

賀来神社内の道標が出来た昭和3年の新天皇の御大典は全国的にお祝いムードで各地に記念行事があったようである。

この他、鵜沼でも鵜沼海岸1丁目、134号線海側（スーパーユニオン前）の松林の中にコンクリートの柱(写真5)がある。「御大典記念 魚附海岸砂防造林地道標」の文字が刻まれ、これも昭和3年製のコンクリート柱である。この標柱は長いこと地中に埋もれていた期間もあり、中の鉄筋が露出し、大分痛みが見受けられる。

この他、本鵜沼4-6-19、原の道祖神と並んで地上高115cm、幅13cm x 13cmのコンクリート道標がある(写真6)。これも長いこと庭先に放置されていたが、ここの地主の関根家が石塀を新設した時、再び立て直された。この道標は文字が彫られたものでなく、ペンキ書きであったようで、文字は消え、今は全く文字のあった形跡も見当たらない。ただこの道標を古くから見ていた会員の榛葉昭市氏の記憶によれば、

【正面】「至ル南、堀川町ヲ経テ海岸十八丁浜道」

【裏面】「北、荻田ヲ経テ皇大神宮へ七(?)丁」

【右面】「至ル東、本鵜沼駅三丁」

と書かれていたそうであり、建立年月は判らないが世間の御大典記念という風潮から建てられたのは、昭和3年の可能性もある。



写真5 御大典記念の柱



写真6 文字が消えた道標

さて、前記賀来神社境内の道標にある「鵜沼本町驛」の命名について最近、小田急本社へ何か資料が残っていないか問い合わせ、広報部の方に調べてもらった。しかし古い資料は全く無く、史実は「小田急電鉄50年史」「小田急電鉄75年史」に頼る程度で、これ等の中にも「鵜沼本町驛」についての記載はないとのことで、この命名時の経緯は推測の段階から進まず、疑問は残ったままである。

(ありた ひろかず)

鵜沼海岸での釣りは 別荘の池での魚とりから始まった

内藤 喜嗣（会員）

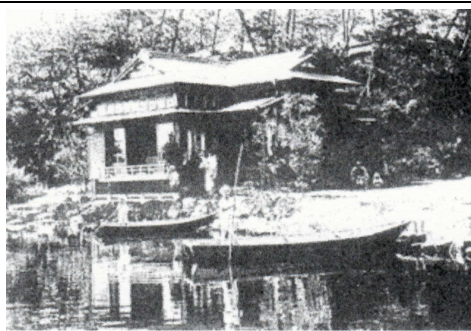
はじめに

前号では太公望だった父 内藤長一から教わった釣りのこと、父が 1940（昭和 15）年 9 月、新たな仕事の準備のため南米ブラジルに行き帰国後に太平洋戦争が勃発、大本營の特命で南方軍に派遣されて日本での釣り三昧は中断となったが海外でしっかり釣りを楽しんでいたことなどを紹介しました。

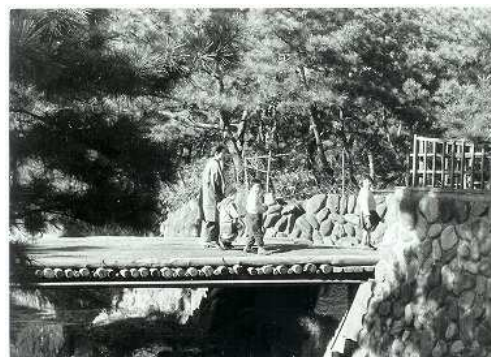
一方、私の方は町の御用聞きのお兄さんや友達から教わって、鵜沼の古川、水路、別荘の大きな池での魚釣りを楽しみました。



大給邸の池の畔



高瀬邸の池

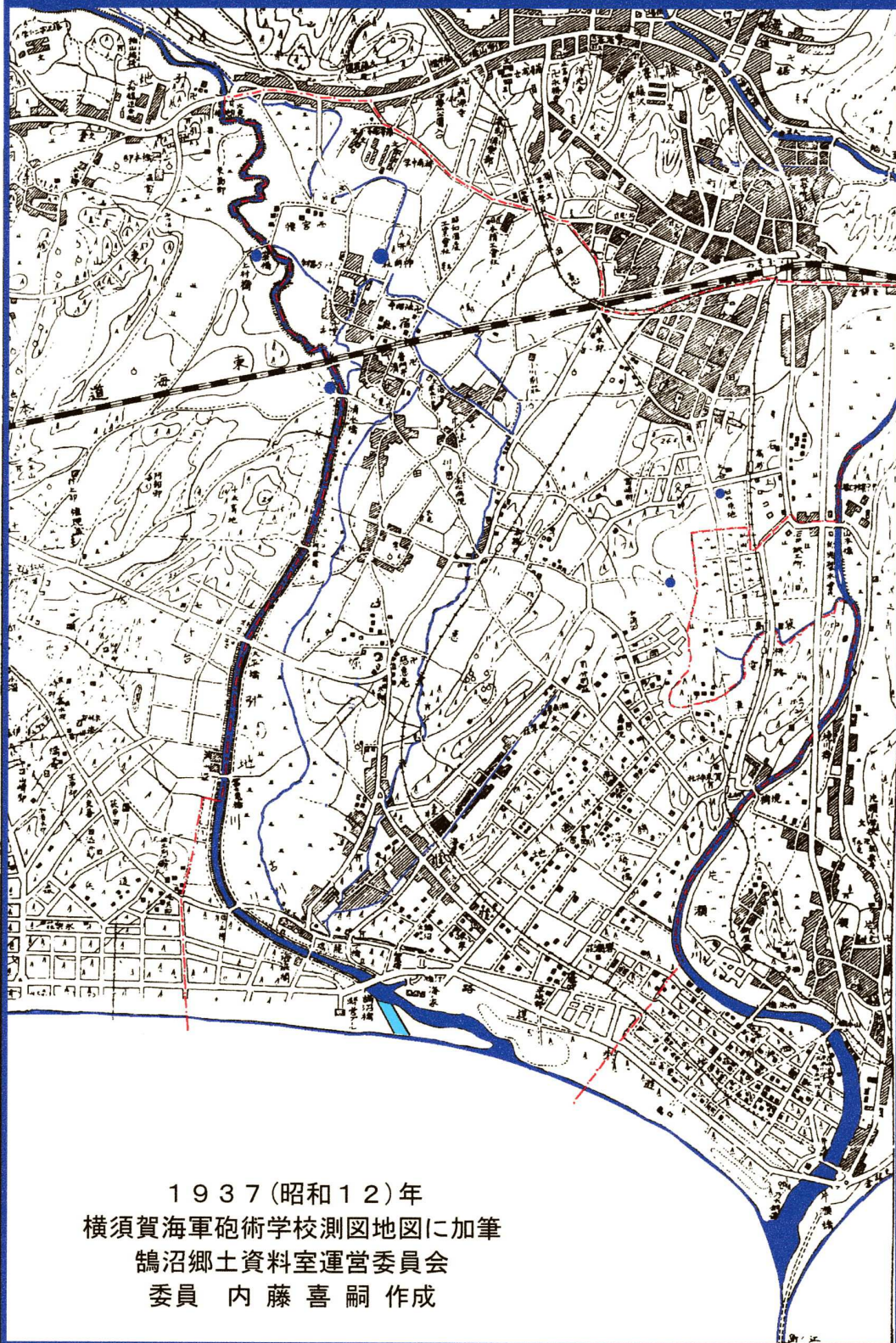


肥え上げ道の脇の古川(堀川)に架かる
鯉取橋



肥え上げ道の脇の古川(堀川)からの引
地川への落とし川

鵠沼本村からの灌漑水路図



1937(昭和12)年
横須賀海軍砲術学校測図地図に加筆
鵠沼郷土資料室運営委員会
委員 内藤喜嗣 作成

鵜沼南部の本村からの灌漑・湧き水・池の
水路図 <1935(昭和10)年頃のおもかげ>



1937(昭和12)年 横須賀海軍砲術学校測図地図に加筆
鵜沼郷土資料室運営委員会 内藤喜嗣 作成

鵜沼南部の生物との触れ合いの記録 ＜1935（昭和 10）年頃～＞

水路と池（P 37 鵜沼本村からの灌漑水路図、P 38 灌漑・湧き水・池の水路図参照）

鵜沼南部地区は 1955（昭和 30）年、公共下水道設置が認可され、旧来の水路は地下に埋没され上は舗装道路となりました。現在では面影は無いが地図で見ると多くの細い水路がめぐっていました。

西からみると

- ①の水路は一番古く、源は石川の取水で（一時期、上村の水車橋で取水）神明地区を潤し、皇大神宮の上の溜池に入り、宿庭に入り清水、苅田を下り堀川、納屋から古川に下っていました。途中 1935（昭和 10）年に鵜沼堰が出来、ここからの取水が合流し堀川の田を潤し下りました。
- ②の水路は苅田と宿庭からの別れが大東で合流、仲東、原から新田道にでて納屋の辻から高根を抜け古川に下っていました。
- ③の水路は現鵜沼洋小学校の校庭位置での湧き水（絞り水）イの流れで、新田道で②に合流。
- ④は一木通りの側溝で、上の湧き水 ロ の流れです。震災前にあった田圃（公民館の西）を下って古川へ。
- ⑤の水路は明治・大正期にあった現湘南学園のグラウンドの所の湧き水 ハ を利用した岡田？の田圃の流れで、後述の別荘地の水路に繋がっていました。これ等は耕作用のものでした。

その他、現松が岡地域にあった水路は 1887（明治 20）年代の鵜沼海岸別荘地開発の折に、境川の河跡湖（現蓮池一帯・川袋の旧鎌倉郡片瀬村域）の水脈が南の砂丘（百両山の南端）の下を抜け数箇所へ湧き出た水（絞り水）ニ ホへを別荘地の植栽・土地改良の促進を図るために同地内に巡らせた水路です。各別荘もまた大きな池を掘り、水路に繋ぎ、残土は盛り土し屋敷をその上に建て、海岸砂丘低地ゆえの浸水対策をしていました。

- ⑥の水路の末は、藤が谷橋を経て境川に流していました。

海辺近くの別荘地は低地で、水脈が浅く、此処彼処に池が掘られ湧き水（絞り水）を利用して、落とし水は古川の鯉取橋への水路 ⑦ に繋がれ、古川に流されていました。

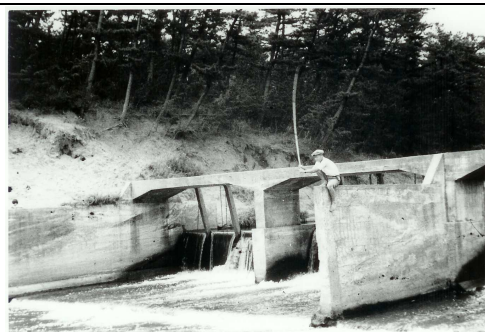
この様に明治中期から別荘地として開発が進んだ鵜沼南部、湘南砂丘地帯（海

岸低地)でしたが、明治以降も 1923 (大正 12) 年の関東大震災を挟んで、度々の大暴風雨、地震による洪水、災害で耕地が流失、彼方此方に湿原がうまれるなど、悩まされました。

1910 (明治 43) 年 7 月に境川、1921 (大正 10) 年と 1933 (昭和 8) 年～39 (昭和 14) 年に引地川の流路の付け替えが行なわれましたが、1938 (昭和 13) 年 7 月の未曾有の豪雨の時は南部一帯を一週間に亘り浸水し、追い討ちをかけて 9 月には台風の豪雨で境・柏尾・引地川が氾濫する大被害となり、竣工間もない鵜沼堰、大平橋も中央の橋脚が陥没する被害となりました。この時、柏尾川支流の養殖場から流れ出し、逃亡した食用のウシガエルと餌として輸入されたアメリカザリガニが全国に拡がることとなりました。



1938(昭和 13)年 7 月と 9 月の大洪水
江ノ電川袋付近の浸水



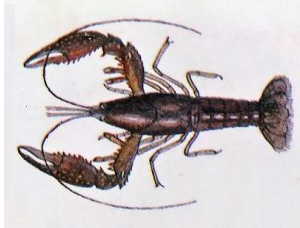
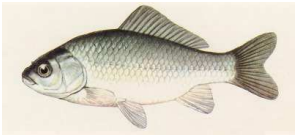
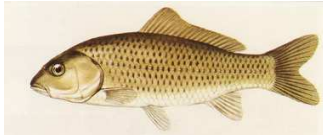
1938(昭和 13)年 7 月と 9 月の大洪水
鵜沼堰の倒壊

別荘地の池のこと

大体の別荘の池は淵に杭が打ち込まれ、板が積み上げられ、土留めがなされていて、岸边には菖蒲の類、蒲が植えられ、中ほどには睡蓮か蓮が植えられています。大きな屋敷は瓢箪池が多く、かなりの深さで中ノ島、太鼓橋を備え、東屋 **A**、吉村邸 **B**、益田邸 **C**、各務邸 **D**、高瀬邸 **E** などは舟遊びが出来るほどのものでした。

鵜沼の殆どの池に生息していたのはクチボソ・フナ・うなぎで、鯉と鯰などがそれに加わっていました。ここに珍しい記事があるので紹介しておきます。

●武者金吉著「地震なまず」の中に「・・・なお一つの例を加えると、当時文部省建築課長であった柴垣鼎太郎 (しばがきかねたろう) 氏は、同じ地震 (関東大震災) の前日鵜沼海岸のある池で投げ網をこころみると、取れるわ取れるわ、一尺 (約 30cm) ぐらいの鯰 (なまず) がバケツに三杯も取れたということである。・・・」

		
ウシガエル	アメリカザリガニ	トノサマガエル
	別荘地の池に 生息した生き物	
ナマズ		クチボソ
		
フナ	コイ	うなぎ

1938（昭和 13）年 7 月以後には方々の池でウシガエルが啼いていました。他のカエル、アカガエル、トノサマガエルにその子のオタマジャクシ、圧巻は 4 月頃に藪から出てくるヒキガエルで数少ないメスをオスが争奪後、重なり合い、池の浅瀬はゼリー状のヒモ（この中に 8000～1 万の卵が入っている）で埋まります。やがて孵化して真っ黒な 1 cm ほどのオタマジャクシが這い出して池を真っ黒に染め、手足が出て、尾が取れると、岸に這い上がり、藪を目指して跳ねてゆきます。しかし多くは途中で干上がり干物になり生き延びるのは僅かなようです。

別荘の池には色々の個性があった

ご高齢の常住者のお宅の池は洒落た造りが多く、お気に入りの錦鯉などが飼われているのを K 邸、T 邸などで二、三拝見したことがあります。これは地図に載らないほど程の小ぶりであり、井戸水の汲み上げで、風流を感じる庭造りと一帯のものでした。

H 邸、後の O 邸の池 H はクチボソ・フナのほかは居なかったのか、モエビがたくさん居たので 4、5 月頃海釣りの餌に採らせて頂きました。

K 邸の大きな池 F は瓢箪の窪みの位置にコンクリートの橋（太鼓の弧が関東大

震災により中央で折れ重なっていた)があり、その上に座り、ここには沢山居たウシガエルの顔を出すのを待ち、鼻先に赤い布を引っ掛けた錨針をチラつかせ、飛びつかせて釣り上げました。

T邸(K邸)の池Gは大きなギンブナが良く釣れ、引きに醍醐味があり、悪童たちは技を競いました。

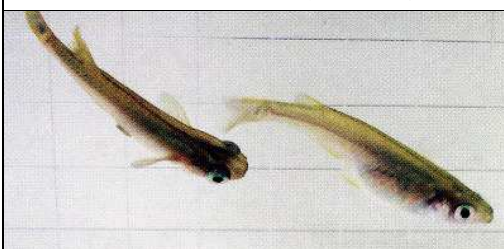
隣のO社の別荘は最初の所有者のC氏が三井の石油部門の方で東南アジアへ出かけられることが多かったからか、ここの池Iには何を食べていたのか台湾の雷魚(カムルチー・タイワンドジョウ)だけが居ました。この魚は大きな釣り針を銅線(電線)に結び、アカガエルの背に縛り泳がせると、釣れました。この魚は獰猛で、5～6月に岸辺の水草に産卵された卵から目が光るオタマジャクシの様な形の稚魚(約1cm)が生れ、親はその下で番をしているので下手に手を出すと喰いつかれました。



1953(昭和28)年、雨が続きとぬかるんだグラウンドでホウネンエビが発生した。



ホウネンエビ



メダカ



ドジョウ



タニシ



カワニナ

一番大きい池 C は M 邸のもので、小田急線開設で庭の南端を線路が横断したため池の排水路が付け替えられ、線路に沿って側溝（現在も線路と蕎麦屋・やぶ茂の間にある）が造られました。ここには池の排水溝から昼間はコイやフナ、クチボソが出てきて夜はうなぎ、雨上がりの水が少し濁ったときは鯰が出てきました。

戦時中、金属供出で小田急江ノ島線の下りの線路がはずされた時期があり、度々夜、懐中電気をもって行き、照らしてうなぎをヤスで突き捕獲、食糧難の折り蒲焼が膳に載りました。

最近まであった有名な M 邸の池 J は戦争後に造られて、素敵な庭園にマッチする錦鯉のいる池として知られていました。

水路と田圃と湿地帯

別荘地の水路 ⑤ ⑥ ⑦ には池と大差ない魚がすんでいたが、隣接する低地では梅雨時の水溜りが出来ると、大量なホウネンエビが孵化し腹を上にして泳ぎまわっていました。① ② ③ の旧来の水路は田圃の灌漑のもので、春先に水が流されだすと新しい息吹の子ブナ、メダカ、ドジョウ、ナマズ、ザリガニ、さらにタニシ、カワニナなどの貝、昆虫の幼虫が川底の穴での冬眠から這い出して盛んに泳ぎだしました。

そして田圃への水の引き入れで、田圃への出入りがはじまります。堀川にあったドジョウ屋は、田圃の出口にウケを仕掛けドジョウを捕って、店裏の池 K に入れていました。

秋の穫り入れ前に引地川では鵜沼堰の堰切りが行なわれました。この日の午後、鵜沼小学校は休校になり、地元の衆、生徒、父兄も堰切の渦で目を廻した魚とりをたのしみしました。

秋の田圃の水抜きが始まると、肥えたフナ、メダカ、ドジョウ、ナマズが水路に戻ってきました。そして冬、水が枯れてくると深みや穴を掘って寄り添って冬を越します。この時は動きが鈍くすぐに捕まえられます。

境川の古い河跡湖の川袋一帯の湿地帯は戦時中、戦後は増産で湿田になっていて、冬は水が減るが年間水があって、日当たりの悪い所は蓮根田だったので、後の蓮池の通称のもととなったと思われます。

1951（昭和 26）年、湘南学園の柳小路（中高 B 地区）校舎があった当時、気温が低かったのか 2 月に氷結し、ここでスケートをしました。そして低地ゆえに、宅地化から取り残され、子供たちの絶好の遊び場となっていました。



鵜沼堰の放流



鵜沼堰の放流

この日、鵜沼小学校は休校。生徒、父兄も堰切の渦で目を廻した魚捕りを楽しんだ。



鵜沼堰の放流

雨降りにもかかわらず大勢の人が集まった。



蓮池 子どもたちの格好の遊び場

ここには堀川の田圃同様に戦時中の9月初めに小学生が学校行事でイナゴ捕りに出かけた。手ぬぐいで袋を作り、口に10cmほどの竹筒を縛り付け（そこから捕ったイナゴを入れた）、農薬のない時代でたくさん捕れました。一晚糞抜きでそのままにし、腹を空にさせ、佃煮にするとなかなかの美味でした。

境川の切り替えで出来た河跡湖・護岸の外側の湿原もまた、浅いところは湿田になっていたが、多くは葦原でフナ、ウナギ、ドジョウ、ナマズが居り、ウケを仕掛ける老人を見かけました。戦後は藤沢市・片瀬のゴミ捨て場（産業廃棄物処理場）の後、埋め立てられ宅地になっています。

引地川の流路の付け替えは、私有地の農地改革事業の一環として組合を設立し神奈川県庁の事業として行なわれました。1939（昭和14）年に完工をみたものの、所有地の分割処理に戦争をはさみ50年を越す歳月が掛かり、1986（昭和61）年に和解が成立するまで湿地帯として放置され、以後は宅地開発が進んでいます。

昔の水路の終末－古川

南部の落としの古川は現在、渚橋の上、肥え上道脇の水門（旧鯉取橋）の所で顔を出し、引地川に注いでいますが、かつては川幅も広く、橋の名のようにコイ、フナ、うなぎがよく釣れました。ボラの稚魚イナが育つ場所でもあったので、秋口の夕暮れは小さな口を浮かして群れを成してやってきました。この魚は餌釣りは難しく、ウシガエルと同じく錨鉤に赤布切れの擬餌で引っ掛け釣りをしました。少し下った片帆橋周辺はうなぎのねぐらで、橋脚の根本や草むらの張り出しの下に穴（巣）があり、夜行性のうなぎは昼間は中に入り、そこから顔を覗かしていました。



肥え上げ道脇の古川(堀川)

うなぎの大好物は鮎で、これには目がないので細い竹の先に結わいて鼻先に持っていくと、飛び出て来るので、この機にヤスで刺し捕まえました。鮎がないときは、シコイワシでごまかしました。空き家の穴はその夜のうちに別のうなぎがもぐりこむので、翌日もまた狙えました。この古川にも境川、引地川の川べり同様、昭和 20 年代まで夏に蛍が見られました。

別荘の池にも居たと思いますが、夏は逗留者が多く夜は出入りをしないので目撃の記憶はありません。クチボソやフナを飼うために貰う藻に、蛍の幼虫の餌になるカワニナとう小さな巻貝がついてきました。このカワニナが繁殖するのを見ると、別荘の池の周りでも蛍が見られたと考えられます。

湘南海岸公園の二本の水路

関東大震災の後、隆起によって広がった海岸砂丘の砂防管理に、1928（昭和 3）年から始まった神奈川県御大典記念魚付砂防林事業でのクロマツの植栽、1930 年からの湘南海岸道路（通称、湘南遊歩道路）と湘南海岸公園のブルーバール（公園道路、車道に乗馬道、散歩道組み合わせたもの）の敷設に沿って、片瀬との境



1950（昭和 25）年秋、引地川切り替え護岸が再度台風で先端が倒壊。河口は東に蛇行をはじめ、堤防の再構築が求められた。河口ではハゼがよく釣れた。

から西に 300mほど、湧き水を利用した水路 ⑧が 5 mほどの幅で二本掘られていました。この水路の南、海浜との間に 5 ～ 6 mの高い砂丘があり、引地川の河口が戦時中に東へ再蛇行したおり、旧河口への落として使われたと思われるコンクリートの側溝・上下

動の鉄扉の排水門が、流れで削られた砂丘の西端から現れていました。

ここにはクロマツの他に葦、蒲などの川辺の植物が茂り、色々のトンボや昆虫（水棲も含め）とその幼虫がいましたが、なぜか魚はクチボソだけでした。

ここは 1938（昭和 13）年の大洪水の影響はありませんでしたが以後、ウシガエル（食用ガエル）が別荘地の各屋敷の池と同様に住み着いて啼いていました。しかし戦後は進駐軍に高く売れるとのことで、夜カンテラを点けて釣りをする輩が根こそぎ捕り、居なくなりました。

引地川の河口

引地川の河口が東に蛇行していた当時の下流では、冬の釣りはだめだが春先になり、スズキの若魚のセイゴが前記の H で捕ったモエビの出番で鵜沼橋の古川との合流点で釣れだし、鮎の稚魚も矢島釣具店で売るゴカイで釣れました。6 月になると鮎は川苔を食べる



1951（昭和 26）年秋の引地川と古川の合流点の護岸スズキ、ハゼ釣り、モクズガニ獲りが盛んだった。

ので、餌釣りはだめで友釣りになり、場所は鵜沼堰の袂から上になります。子ハゼもゴカイで東の護岸で釣れだします。当時の先端の護岸は丸太を打ち込んだ枠組みに玉石を針金で縛って落とし込んだもの（蛇籠）で、隙間が多いのでここにはアユカケがいたが姿を見かけるがなかなか釣れません。反対にクサフグは良く当るがあの鋭い歯でハリスを切られました。ここにはハサミに毛の生えた中型のモクズガニがたくさん居て、カギで引っ掛けて捕りました。味噌汁にすると中々の味ですが、ジストマという寄生虫が居るのでしっかりと茹でないといけない危険でした。



1950(昭和 25)年頃、鵜沼橋東詰め護岸でのハゼ釣り

5月の夕刻、赤い小さな点が群れてちらちらと上ってきます。これは白魚（シラウオ）で、蚊帳のお古で作った四つ手を沈め、上を通る時に引き上げ捕らえました。河口で叔父は投網を良くしましたが、ナイロンのない当時の網は大変重く、苦勞の割りに掛かるのはクサフグで、たまにイナカセイゴ、ワタリガニが捕れるだけで、あまり頂けませんでした。

秋になるとハゼが良く釣れ、太公望の竿がならびました。しかし 1960（昭和 35）年頃から河川の水質汚染が始まり、多くの魚が死にました。そこで当時、藤沢市の観光課と組んで活躍していた藤沢釣友会は、江の島水族館の館長・雨宮育作博士の指導で、1968（昭和 43）年まで毎年、茨城県大洗町から抱卵の親ハゼ 1 トンを取り寄せ境川と引地川の河口に放流をしていましたが、河川の浄化が間に合わず、何も出来ずに終わったようでした。

海浜のこと

地引網は昔からこの土地の風物詩です。今はサーファーが多く、投げ釣りは出来ませんが、かつては盛んで市の観光課と藤沢釣友会共催の春のキス、秋のボラ釣りの大会が大々的に行なわれていました。船釣りの大会は片瀬からの船でした。



1979（昭和 54）年秋、湘南海岸公園前江ノ島投げ釣り大会



クサフグ



ボラ



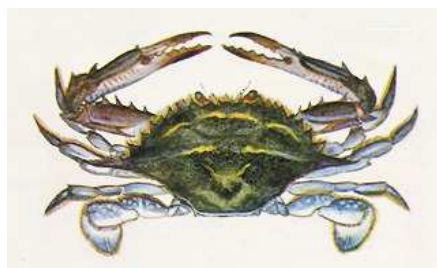
アユ



ハゼ



モクズガニ



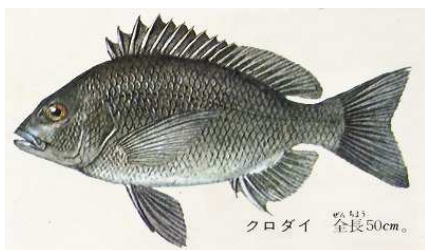
ワタリガニ



キス



メゴチ



クロダイ



シタビラメ

春の夜釣りはメゴチ、キス、イシモチ、秋はクロダイ（小ぶりのものでチンチンと言った）、コトヒキ（ヤカタイサキ）、イシモチでしたが、ここでも邪魔者のクサフグが掛かったり、針を取られたりしました。春先はたまにワタリガニ（ガザミ）が掛かってきました。このカニは地引網に入りましたが、漁師は刺し網の荒いのをゴロ網風に引いて獲っていました。

秋の夕暮れ、地引網の網洗いのあと、潮の揚げ端時に特殊な仕掛けの投げ縄で、大きなボラが掛かりました。赤い玉の目印の浮が浮き沈みし、しぶきが立ったら、縄の端を持ち、丘に向け走り、引き上げます。この時期のボラは臭みがなく味噌煮にして食べました。

冬の寒い時期、片瀬西浜の岸边にシタビラメ（クロウシノシタ）が寄り、浅瀬を歩き回り、足の下に踏みつけて獲りました。一瞬魚が暴れるので慣れるまでは足を上げてしまい、逃げられてしまいます。

終戦後、引地川の切り替えが再度行なわれましたが、河跡湖（通称、溜り）が2年間埋められずに放置されました。最河口の曲がり角は2m程の深さがあり魚がいっぱい居ました。ヤナギモ、エビモも多く生えていて、釣針に掛かったハゼはこの中に逃げ込むのでモが絡み、なかなか上がりません。そこでここでも足での踏み付けで大きなハゼがとれました。溜りで育ったイナはボラになり海に出たので、土用波が岸の砂浜を越えて入ってくると、この波を遡り海に戻ります。この機に追い駆けて捕らえます。

引地川の河口が蛇行していた当時、河口にはアサリにシジミも混じっていたようですが戦後はアサリもいなくなりました。ここはハマグリが有名で大潮の時は潮干狩りで、角材に五寸釘を数本打ち抜いて引き腕をつけた熊手のような道具で獲りましたし、夏の海水浴中も足で踏んで獲れたものです。漁師は和船で岸辺を籠引きして獲っていました。しかし戦後にバカガイ（アオヤギ）が混じりだしてこれに負けたのか殆どいなくなり、さらに追い討ちの公害でバカガイが大量に死んで打ち揚げられたのを機に、キサゴ（ナガラミ）もいなくなりました。





近年、藤沢漁協では松浪から西で、茨城の貝で養殖を行ない、ナガラミが復活しました。昔は一番岸に居る三角形のフジノハナガイが波で砂底から掘り出され、打ち揚げられ、波が引くとあわててあの小さな殻を立てて砂に潜り込む様を見るのは楽しいものでした。

海辺での早朝散歩の楽しみに貝殻拾いがあります。昔は色々の種類(クチベニガイ、サクラガイ、バカガイ、フジノハナガイ、ベケイガイ、ワスレガイ、ハマグリ、アサリなど)の貝殻が波打ち際を敷き詰めていましたが、いまは僅かに残るだけです。

1976(昭和 51)年、公害で死滅した青柳貝

この中で桜貝は有名ですが薄い貝殻は波の具合で一面に広がったり何もない日など、気まぐれです。これらの貝殻に小さな穴の開いているのが多々あります。これは海の砂底にすむツメタガイと言う巻貝の仕業です。酸性の唾液を出し他の貝の貝殻に穴を開け中身を食べるのです。

そして波打ち際から少し上がった所を透かして見ると、何やらうごめいています。これはシオマネキというスナガニの一種で、左右のはさみの大きさの違うカニです。飛び出た目玉を立て警戒しながら砂をすくい、砂の団子を作っています。近づくると一斉に穴に逃げ込み、遠退くと見るや一斉に出てきます。昼間は穴の中にじっとしています。この穴に乾いた砂を流し込み、周りから掘って捕まえ、他の穴に入れ込むと侵入者を追い払おうと穴の主と一緒に飛び出て来るので、次々と捕まえることができました。カニといえば池のある別荘の林にはアカテガニ・クロベンケイガニなどがいて、中でも現在の松が岡1丁目の下藤が谷公園はカニ公園と言われ、アカテガニ・クロベンケイガニなどが沢山いました。

鵠沼の海岸にはゴカイやイソメは居なかったので片瀬川の西方の東岸の洲でゴカイ、西浜の西岸の洲でイソメの潮穴を見つけ、灯油を少々かけ穴から這い出たところを捕まえました。しかし、これにも潮時があるので釣り餌は鵠沼銀座通りの矢島釣具店、西方の山口釣り船店で求めたものです。

このようにして別荘の池での魚とりから始めた鵠沼海岸での釣りは、わたしの楽しい楽しい思い出のひとつです。

(ないとう よしつぐ)

公民館まつり 2017

『岸田劉生来鶴100年 絵日記から分かる鶴沼での生活』

岸田劉生が鶴沼に住んだのは大正6年から12年までである。今年はその大正6年から100年になる。

10月14、15日の公民館祭りの展示テーマは、それにちなんで岸田劉生を取り上げたいと有田会長から提案があり『岸田劉生来鶴100年』サブタイトル『絵日記から分かる鶴沼での生活』ということが例会で決定された。

劉生は鶴沼時代の後半の3年、克明に絵日記を付けていて出版されている。それには日常の生活が活写されていて、それを紹介しようという事になった。

岸田劉生に関しては2002年9月、藤沢市民ギャラリーで藤沢市教育委員会と共催で『華ひらいた鶴沼文化展』、2005年、鶴沼郷土資料展示室と共催で『鶴沼ゆかりの文化人展』、2010年11~12月藤沢市生涯学習課主催「湘南コミュニティスクール」としてレディオ湘南から6回にわたって『岸田劉生と鶴沼』という講演を岡田哲明会員が行っている。また会誌「鶴沼」では72、76、78、85、86、96、99、102、103、104、107、111の各号で劉生に関する記事を扱ってもある。

展示ストーリーは「岸田劉生とは」「劉生絵日記とは」「いつ、どこに住んだか」「誰と住んだか」「誰が訪ねて来たか」「どんな生活か」「歩いた道、行ったお宅やお店」「誰を描いたか」「どこを描いたか」「何を描いたか」「日本画、装幀、執筆」「なぜ去ったか」「京都時代、鎌倉時代」「満州旅行、逝去」とし、それに『華ひらいた…』のとき作った「住いの模型」も展示しようと決まった。

これをまとめるのに上記の資料を継ぎ接ぎすれば、容易に展示物は作れるものとしてスタートしたのであるが、いざ始めて見ると、これは見通しが甘かったといわざるを得なかった。『絵日記から分かる鶴沼での生活』というのだから今までの展示や会誌の資料では切り口が全く違うのである。しかも出来るだけ分かりやすくするためビジュアルを多くし、文章は極力少なく短くした。

結局は絵日記からの絵の拡大コピーの作成、展覧会図録などからの写真のコピー、油絵のコピー、それらの捨取選択など大変な作業量になってしまった。

文章もほとんどを新規に作成せざるをえず、そのために再三再四、日記文を読み直すことになってしまった。加えてコピーサービス湘南が閉店したのモニにかと不便であった。

(文責：岡田哲明)

鵜沼地区公民館まつりの展示に参加して

笠羽 巳年子（会員）

8月の例会で10月14・15日の鵜沼地区公民館まつり展示についての話し合いがもたれました。岸田劉生来鵜100年の節目、資料のそろっている劉生展をと一致。しかも今回は一般に知られていない「劉生の絵日記」から日常生活と人物像を知ることとしようと決まりました。

(1) ラシャ紙全紙9枚にまとめる (2) 劉生の住んでいた付近の地図作成 (3) 龍星閣版の劉生絵日記3巻(箱入り)や資料、当時の新聞、雑誌、劉生に関する本。興味深い絵日記から抜粋してのコピー作成 (4) 岡田哲明会員作成の劉生の家模型(硝子ケース入り)。これらを元に展示構想ができ展示作業日までに準備ができました。

開催日の2日間とも、あいにくの雨でたくさんの方たちの来室は望めませんでしたが、来場者はとても熱心に見入っておられ、質問に岡田会員はじめ他の会員たちも丁寧にこたえていました。特に印象深かったことは大正時代の鵜沼の地図を見るまなざしの熱いこと。鵜沼は近年若い家族がとてもふえています。自分たちの住む鵜沼の文化や歴史、地理、風土、暮らしを知ることが大切。地図は“私はどこに住んでいるのかな”と興味をもつ。又なんといいても劉生が一日も欠かさず描かれた絵日記からは、当時の鵜沼風景はもとより当時の生活の細々、人との交流、室内の調度品などがみえて来場の皆さんは楽しんで観覧していました。七輪の牛鍋食事風景や節分・菖蒲湯・障子張り絵など季節感のある家庭生活、大好きな相撲取り、蓄音機・火鉢の室内、麗子像の高いモデル台、朝からオムレツや肉をたべる、有田でアイスクリーム、来訪者の図、寝ている図など絵の持つ力で人を魅了します。子煩悩だけど癪癪もち、スマートにはみえない劉生の人間的魅力はどんなものだったのでしょうか。岸田家への来訪者は作家、学者、出版関係、



画家、美術家60人を越えます。

100枚は描いたといわれる「麗子像」など人物画家として鵜沼に暮らした劉生は、家庭も画業も人との交流も一番幸せな時期と知りました。転地療養のきっかけだった肺尖カタルも心配なし。大正12

年9月関東大震災に遭遇して家がつぶれますが、その間も休みなく日記が綴られています。地割れ、液状化し腰まで泥田に浸かって藤沢まで逃げる。余震もある。そんな時、劉生は神に祈るのです。つぶれた屋根にのっている家族の写真正はおなじみだが悲壮感がなく家族無事でノンビリとした印象。劉生の人となりを感じます。おおらかな時代背景もありそうです。(かさば みねこ)

岸田劉生は



いつ・どこに住んだか



だれと住んだか



どんな生活だったか



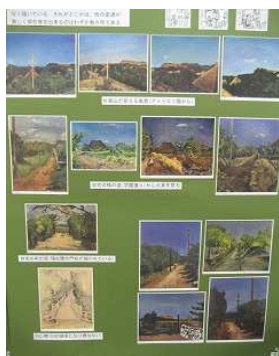
劉生が歩いた道 行ったお店やお宅



だれ(人物)を描いたか



どこ(風景)を描いたか



なに(静物)を描いたか



いつ・なぜ去ったか



長谷川祐さんが、ふりむいたらフツと消えたかのように逝ってしまった。

「何かきいてる？」 竹内氏からの電話である。

「つい昨日踏み切りの近くでみかけたんだヨ・・・」

会長と岡田さん、僕とで即、伺った。

花に埋まって、あの独特な笑味をうかべた遺影と共に、

「浄智院祐譽目連居士」の法名があった。

僕はまだ、うろたえるばかりで語るべき言葉のお、かたが

千々に乱れるばかりで・・・

たゞかろうじて残ったのは、

「逝く者の曳く光は、生き残る者の胸を透かし照らす」という出処不明の一行のみだった。

里子夫人に、その時のようすを伺った。

四月七日、早朝のことであったという。

祐さん、と呼ばせて下さい。あなたはいつの時も困惑するでもなく、傷を負わぬよう、距離をおくでもなく、揶揄するでもなく、私たちに接してくれました。

祐さんと僕にしても多くを語ることはありませんでした。

私たちは黙ったままで多くのことを語らいよく感じあいしました。現在を生きる、恥についても、痛みについても、

ひとり逝かざるを得ない哀しみについても。

祐さん、あなたは、ひるむでもなく、いさめるでもなく、いつも通り真正面から、ごくまなじめに、静かに対してくれました。

いく百もの巧言よりも、あなたの無言の篤実に僕はひかれました

悪達者と、おためごかしが、のさばる時代に、わずかに残る廉恥心をあなたの中にみていました。

飾りない真心をば、たくさん教えていただきました。

祐さん、ありがとうございます。

あなたが愛した湘南の海が九月の夕日にまばゆい光を思いきりあたりにまき散らしています。

万華鏡の目まぐるしい彩りがとりわけ現世をまどわしているかのようです。

祐さんの方からもながめられますよネ・・・

しばらく僕はこのシンホニーの中に留まります。

九月某日

森岡 澄



鵜沼の範囲は？

渡部 瞭

昨今、藤沢市当局が東海道線以北の鵜沼神明と鵜沼を鵜沼地区から外し、藤沢地区に含めることを目論んでいるという噂を耳にした。

これが事実ならば、地域の伝統や文化を無視した文字通りの「ご都合主義」として、声を大にして異論を唱えたい。

藤沢市 13 地区の中でも鵜沼は最も人口が多く、50,000 人を遙かに超す。その人口統計では既に東海道本線以北は除かれている。行政の最も基本的な統計の面で、鵜沼地区の新旧を単純に比較することはできないのである。例えば小中学生が社会科の調査などで鵜沼地区の人口変化を調べなさいという課題が出された場合、ある年から鵜沼の人口が急に減ることに驚かされることになる。その原因を探っていくと、鵜沼地区の統計範囲が一部切り捨てられていることに気づかされる。これを修正してつじつまの合う統計グラフを作ろうとすると、住居表示毎の統計を探して計算し直さなければならなくなるのだ。

これは人口のみならずあらゆる統計にも当てはまる問題である。人口や面積ならば丁目毎の細かい数値が公開されているから、根気さえあれば計算し直すことも可能だが、それ以外の統計の場合はお手上げといえよう。

伝統的な大字としての鵜沼

鵜沼郷の呼称は平安時代末期にあらわれるが、境川（当時の呼称は固瀬川）以西、引地川以東で、南辺は海岸線、北辺は江戸時代に整備される旧引地橋東詰にあった旧東海道鍵の手部分のショートカット北側が藤沢地区になった。これにより旧鵜沼 1 番地は鵜沼地区から外された。

- 1870 年の鵜沼村戸口資料によると鵜沼村の各戸に 1 番から 267 番の戸別番号がつけられていた。実際の戸数は 285 戸が記録されている。
- 1873 年 5 月 1 日に神奈川県は区・番組制施行、鵜沼村は第 17 大区第 2 小区となる。この際に 28 の小字に分けられ、引地橋東詰を 1 番地とし、南東に向かって 7000 番台までの番地の制定が行われた。
- 1908 年 4 月 1 日に「藤沢大坂町」・「鵜沼村」・「明治村」が合併して「高座郡藤沢町」が誕生する。この時に旧鵜沼村はそのまま大字鵜沼となった。
- 1947 年 4 月 1 日に「鎌倉郡片瀬町」が藤沢市に合併した。
- 1964 年から数度にわたって鵜沼地区の住居表示が制定されたが、その際大字鵜沼であったところは「鵜沼〇〇」あるいは「〇鵜沼」というように、必ず鵜沼の文字がつけられた。この住居表示制定の際、いくつかの調整が行われた。
- 1930 年代に行われた引地川下流の河川改修により、直線化された引地川以西の部分は北部は辻堂太平台となり、南部は鵜沼海岸四丁目となった。
- 片瀬地区のうち、江ノ島電鉄以西の字桜小路は鵜沼藤が谷四丁目に含まれることになった。境川と江ノ島電鉄の間の字大源太は、地域住民の希望により片瀬地区に残った。
- 藤沢駅南口から神奈川県道 32 号藤沢鎌倉線以南の地域は、国道 467 号を境に東側が鵜沼東、西側が鵜沼石上一丁目となった。
- 行政区分としての鵜沼：藤沢市は市域を 13 地区に分けて行政を進めており、鵜沼地区もそのひとつである。

都市計画上の地域区分としての鵜沼地区

藤沢市は 1999 年 2 月に「藤沢市都市マスタープラン」を発表し、それに沿った都市計画が進められている。このマスタープランにおける鵜沼地区には藤沢地区の南藤沢を含めている。

統計処理上の鵜沼地区

現在藤沢市が公開している最も新しい統計資料は、2005 年 10 月 1 日の国勢調査速報値であり、それによれば鵜沼地区の人口は 52,318 人（13 地区で最高）、面積は 5.55km²、人口密度は 9,427 人/km²（13 地区で最高）となっている。ただ

し、この数字は鵜沼神明を除き、藤沢地区の南藤沢と片瀬地区の旧字大源太のうち境川以西の地区を含んだ地域のものである。

鵜沼市民センターの管轄範囲

鵜沼地区では公民館は 1958 年に市内で 2 番目に開設されたが、市民センターは 2003 年、市内で 11 番目に公民館に併設された。鵜沼市民センターの管轄する自治会・町内会の範囲や民生委員・児童委員の分担地域からは鵜沼神明北部は外れており、南藤沢が含まれている。

公立小中学校の学区

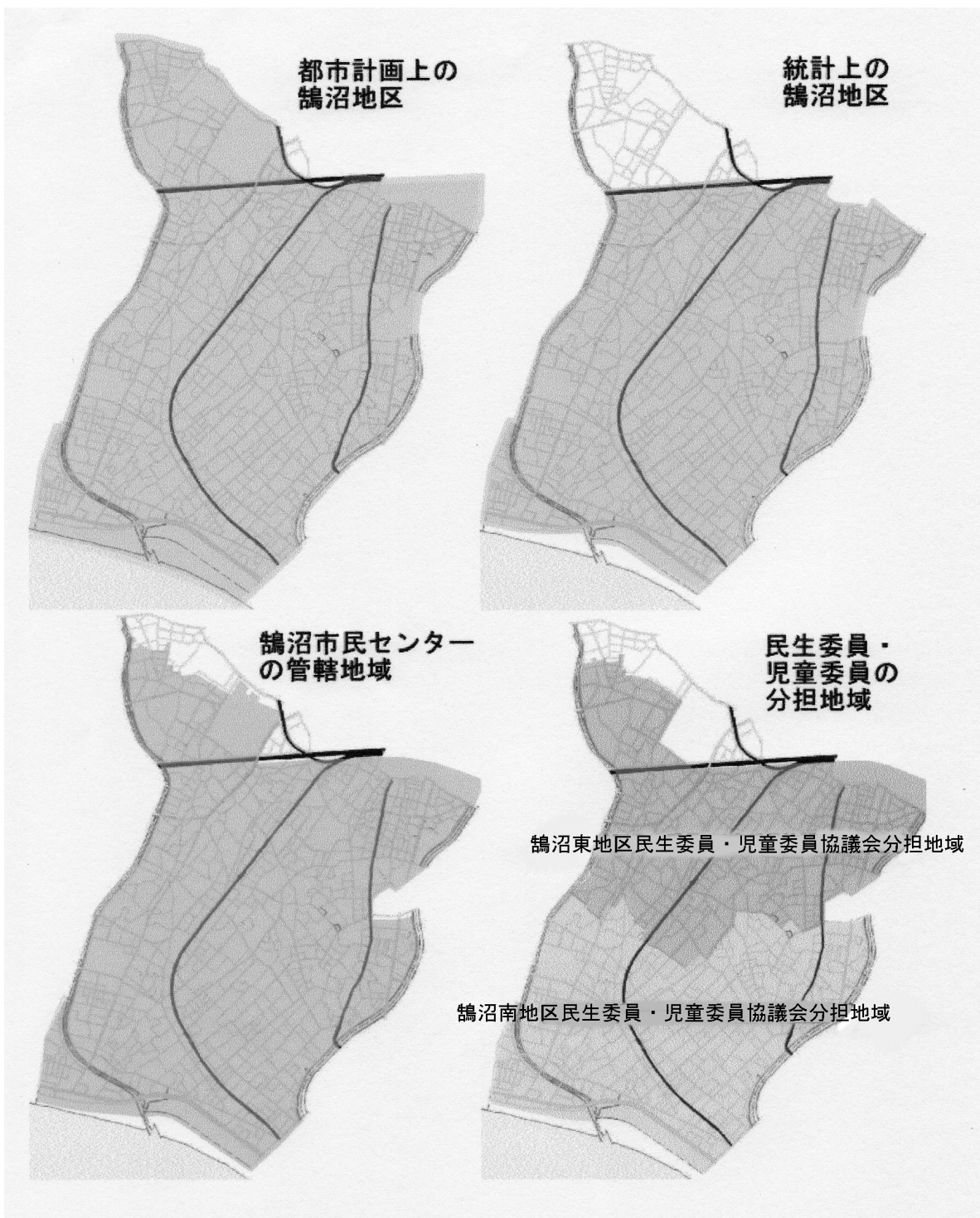
小学校

学制発布より早く、1872 年 7 月 12 日には鵜沼学舎（→藤沢市立鵜沼小学校）が開校し、鵜沼村全域を学区とした。南東部の開発による人口増加により、1946 年 8 月 10 日、藤沢市立鵜沼国民学校（→藤沢市立鵜沼小学校）が開校し、本鵜沼駅付近から南を学区とした。さらに 1970 年 4 月 1 日、藤沢市立鵜沼南小学校が開校し、鵜沼小学校学区から分かれて鵜沼海岸全域を学区とした。この鵜沼・鵜沼・鵜沼の 3 校が鵜沼地区を 3 分する形だが、鵜沼神明の東半は藤沢市立本町小学校、鵜沼石上の東部と鵜沼東は藤沢市立新林小学校、藤沢駅南口周辺は藤沢市立大道小学校の学区になっている。

中学校

1933 年 11 月 14 日、鵜沼北端部に藤沢町内の高等科を統合する藤沢高等小学校（→藤高国民学校）が開校し、これが 1947 年の新学制により「藤沢市立第一中学校」になった。同時に新たに藤沢市立鵜沼中学校が開校し、東海道本線を境に学区を分けた。1956 年 4 月 1 日、辻堂東海岸に藤沢市立湘洋中学校が開校し、鵜沼松が岡全域と鵜沼海岸の大部分が鵜沼中学校の学区から分割された。この第一・鵜沼・湘洋の 3 校が鵜沼地区を 3 分する形だが、鵜沼石上の東部と鵜沼東は藤沢市立村岡中学校の学区になっている。

（わたなべ りょう）



<故渡部瞭会員『鶴沼を巡る千一話』第 0004 話より>

「鵜沼を語る会」活動の記録

(平成29年4月～11月)

平成29年4月例会

4月11日(火) 10時～12時 第1談話室 18名出席

司会進行 有田会長

- 会誌『鵜沼』114号配布(製本作業は4月10日、第3談話室で行った)
- 本年度の活動について、提案を募った。
- 『お話』—「鵜沼のサーフィンとビーチスポーツ」(鵜沼郷土資料展示室で開催)の展示を内藤会員の説明で見学した。

4月運営委員会

4月25日(火) 10時～12時 第1談話室 8名出席

- 藤嶺学園に同校0Bの今井達夫著の小冊子、今井の遺稿掲載の会誌を贈呈した。
- 同校は1915年の創立。創立100年を機に卒業生の実績をまとめている。

第31回総会・5月例会

5月9日(火) 10時～12時 第1談話室 19名出席

総会議長 有田会長(会則に従い議長を選出)

総会議案の審議を行ない全会一致で承認された。

- * 平成28年度事業報告 * 収支決算報告 * 今年度の事業計画案・予算案
- * 役員案

＜今年度事業計画＞

公民館まつり出展、史跡めぐり、既存会誌および蓄積された資料の有効利用、会誌発行をメインテーマとし活動を進めてゆく。今後、相応しい活動テーマが提案された場合、活動内容ならびに経費について検討し新たなテーマとして取り組んでゆく。

5月例会 総会終了後、フリートークとしクゲヌマラン保存について話し合った。

5月運営委員会

5月30日(火) 10時～12時 第1談話室 8名出席

6月例会

6月13日(火) 10時～12時 第1談話室 17名出席

司会進行 佐藤弘会員

—会誌に掲載された今井達夫遺稿をまとめた小冊子作成の提案があったが、今後の検討課題とした。

—会誌バックナンバーの会員用頒布価格を¥500から以下のように改定した。

最新2号＝現時点でN o. 113/114：¥200 それ以前の号：¥100

—公民館サークル交歓会の報告および当会のメンバー交代（守谷会員←中島会員）が報告された。

『お話』—「明治中期から現在に至る江ノ島の変遷—地形、島周りを中心として」をテーマに内藤会員が映像を使いながら話した。

6月運営委員会

6月27日（火）10時～12時 第2談話室 9名出席

7月例会

7月11日（火）10時～12時 第1談話室 15名出席

司会進行 竹内会員

—公民館まつりの展示テーマが発表された。岸田劉生来鶴100年にちなみ、劉生の鶴沼における生活を取り上げる。プロジェクトチームで進めることになり、メンバーを募った。

—会誌について：会誌の発行時期を本年度以降、総会および公民館まつり開催のタイミングを考慮し6月と12月に発行することを基本とすることにした。

115号は12月発行予定とし、10月中に原稿を取りまとめる。

—8月は例会を開催しないという提案があった。本年度は開催し明年度以降は検討する。

『お話』—「江ノ島の漁業と釣り」をテーマに6月例会に続き、内藤会員が自らの体験を交え話した。

7月運営委員会

7月25日（火）10時～12時 第1談話室 5名出席

8月例会

8月8日（火）10時～12時 第1談話室 12名出席

—公民館まつりの展示構想が説明され、会員からの意見を収集した。

『お話』—終戦記念日を前に、西村会員が用意したDVD「ゼロ戦の栄光と真実」を観賞した。

8月運営委員会

8月30日（水）10時～ 高木ふれあい荘 6名出席

高木ふれあい荘に保管されている、これまでの展示に使った岸田劉生に関する資料を点検。10月の公民館まつりの展示に使用するか9月例会で検討する。

9月例会

9月12日（火）10時～12時 第1談話室 13名出席

司会進行 有田会長

—高木ふれあい荘に保管してあった展示材料を提示。公民館まつりの展示内容について会員の意見も反映するように話合った。

9月運営委員会

9月26日（火）10時～12時 第1談話室 6名出席

10月例会

10月3日（火）10時～12時 学習室① 13名出席

司会進行 守谷会員

—公民館まつりの展示『岸田劉生来鶴100年—絵日記から分かる鶴沼での生活』について岡田会員から概要が説明された。

—公民館まつりの展示作業、当日の当番、設営等の協力者を募り、決定した。

10月運営委員会

10月31日（火）10時～12時 第1談話室 6名出席

11月例会

11月14日（火）10時～12時 第1談話室 15名出席

司会進行 守谷会員

—公民館まつりの報告と会員からの感想・意見を聞いた。

—会誌115号の原稿集結状況および印刷・製本作業を説明し協力者を募った。

『お話』—鶴沼郷土資料展示室で開催中の「写真に見る鶴沼南部の変遷」を内藤会員の解説付きで見学した。

11月運営委員会

11月28日（火）10時～12時 第1談話室 7名出席

<11月現在会員数 44名> 新会員 杉山儀和さん（2017.5）

（書記 佐藤弘）

編集後記

- 11 月に入り小春日和の日が続いたが中旬以降、寒波に覆われた。ようやく富士山も真っ白になり冬の姿になった。10 月に台風 21 号が襲来、江の島ヨットハーバーに大きな被害をもたらした。TV 画面に映し出された防波堤を越える高波の映像には度肝を抜かれ、すぐ近くの江の島でおきていることが信じ難かった。「藤沢駅南口周辺の移り変わり」（佐藤和子会員）は自らの体験を元にかかれたもので、むかしを知る人たちにとっては懐かしい思い出として、蘇えったと思う。「鵜沼海岸の釣りは別荘の池での魚とりから始まった」（内藤会員）も同様で、鵜沼堰放流日の魚獲り、引地川河口でのハゼ釣りなど、楽しかった子どもの頃の日々を思い出させてくれる。（弥）
- 公民館まつりの慌ただしい中、『鵜沼』115 号の準備にとりかかり、やっと発行に漕ぎ付きました。今回から発行月を遅らせたので「公民館まつり」の展示内容も扱うことができ、良かったと思います。昭和 51 年 7 月の第 1 号発行から 40 年を越え、その間、鵜沼に関する多くの紹介、発掘があり、貴重な記録集となっています。次々とバトンタッチをしながら皆さんで語られ、調べられてゆく鵜沼のさまざまな事柄。これからが楽しみです。他ではなかなか見られない地域研究史ですので、大事にしてゆきたいと思っています。（和）
- 広辞苑には「民俗学：一つの民族の伝統的な生活文化を研究対象とし、文献以外の伝承を有力な手掛かりとする学問。日本では柳田国男・折口信夫らの主導によって独自の発展を遂げた」また「郷土史：郷土の先人の業績や文化・習俗の由来などを明らかにし、郷土愛を培うことを目的とする」とあり、二つには共通する部分が多い。丸山久子が、もし会員であったら鵜沼を語る会は、どのような展開を見せていたであろうか。（岡田）
- 心配された原稿の集まり具合は 10 月の公民館まつりが終わり 11 月に入って急速に良くなり、読み応えのある内容でページ数も十分なものが多く集まった。これで今号は、12 月半ばには発行できる運びとなった。今回から発行月を従来の 3 月/9 月から 6 月/12 月に変更。5 月総会、10 月の公民館まつりの展示などのイベント記事を、時間をおかずに掲載しようというのが変更目的である。今号に神谷会員の「芥川龍之介の中国旅行と手帳」や笠羽会員の「公民館まつりの展示に参加して」など、新しい会員の記事が寄せられたのは心強く嬉しい限りである。（ありた）

『鵜沼』 第 115 号
平成 29 年 12 月 12 日発行

本誌の記事引用の際は
ご連絡ください

編集・発行 鵜沼を語る会
藤沢市鵜沼海岸 2-10-34
鵜沼公民館内
電話 0466-33-2002

URL <http://kugenuma.sakura.ne.jp/>